

〈座談会〉

漫画『フィチンさん』をとおしてみる ハルピンの情景，満洲国，戦後日中関係

上 田 貴 子¹
坂 部 晶 子²
齋 藤 一 晴³
原 田 忠 直⁴

上田としこ（1917～2008）・漫画家

東京生まれ。ハルピンの小学校，東京の高校を卒業。28歳のときにハルピンで敗戦を迎え，翌1946年に引揚げる。1957～1962年に『フィチンさん』が少女漫画雑誌の『少女クラブ』に連載される。そこには満洲国のハルピンで暮らす中国人からみた日常が描かれている。中国引揚げ漫画家の会のひとりであり，会のメンバーである『天才バカボン』や『おそ松くん』の作者である赤塚不二夫や，『あしたのジョー』のちばてつや，『釣りバカ日誌』の北見けんいちらから「お母さん」と呼ばれ慕われた。ペンネームには，執筆活動の時期によって上田としこや上田トシコ，上田とし子などがある。代表作には，『ボクちゃん』や『ボン子ちゃん』，『お初ちゃん』など。

※敬称略の扱いについて。

座談会参加者の総意として，敬称は原則，省略させていただいた。しかし，座談会の雰囲気を壊さないことや，発言者との研究や教育活動におけるこれまでの関係性をふまえ敬称を付したままの場合も一部あることをあらかじめお断りしておきたい。

【座談会の主旨】

原田：本日の座談会は，1957年1月から1962年3月にかけて『少女クラブ』で連載された上田としこ作の『フィチンさん』について，中国の近代史，なかでも満洲の歴史に造詣の深い3人の研究者の方々に語っていただくというのが主旨です。まずは，先生方に，それぞれ『フィチンさん』との出会いから，今回の座談会の意義という少々大袈裟ですが，狙いのようなものを語っていただくことから始めたいと思いますが，いかがでしょうか。

上田：満洲体験を扱った漫画ということで、先に村上もとかの『フィチン再見！』（注：村上もとかによる、上田としこについての伝記漫画。2013年から17年にかけて『ビッグコミックオリジナル』に連載される。単行本は全10巻で小学館から発売）に手を伸ばしたんですよ。そこで、存在を知って、「わっ、こんなのあるんだ」と思って、Amazonで買おうとしたら、出版後しばらくたっていただけでしたがプレミア付きの値段になって、「これは買っとかないと！」と急いで研究費で買いました。

坂部：私も研究費で買いました。

原田：私も『フィチン再見！』が連載してた時に読みましたけど、『フィチンさん』をお求めになったのはそれを読んでからってことですか？

上田：連載時ではなく、村上の『龍-RON-』（注：村上もとかによる昭和初期を題材とした歴史漫画。1990年から2006年まで『ビッグコミックオリジナル』に連載。単行本は全42巻、小学館より発売）の存在を知っていて、彼の満洲観が気になってAmazonで購入しようとしたら、一緒に『フィチン再見！』をAmazonにお勧めされました。さらに『フィチンさん』もお勧めにあがってきて、全部欲しいけれどどうしようと、しばらくためらったあと、「ちょっと高いけど買おう！」という流れでした。

原田：なるほど。

坂部：私は多分読んだ時はそんなに変わらなかったと思うけれども、京都にあるマンガミュージアム…

上田：漫画ミュージアム！

坂部：そう、戦争関係の展示があって、そこにいった時に自分のリストから外れている漫画を色々チェックしていて…

上田：チェックするとは、さすがですね。

坂部：その中で『フィチンさん』が、確かそのとき売店にあったんだけど、これをここでパッと買うには高いと思って、帰ってから研究費で申請出して買いました。『フィチン再見！』もその時情報として知って、こちらは後で自分で買いました。

原田：復刻版ですね。

上田・坂部：そうです，そうです。

原田：そもそも今回の企画は，坂部先生が漫画好きという話からですよ。

坂部：そう。

原田：研究会の後で，飲んでいるときに漫画が面白いって話になって，『ファイチンさん』もそのときに出た話だったと思うんですけども，やってみようって盛り上がって・・・。

上田：その一方で漫画で共同研究しようって言い出したりもしていました。

原田：そうなの？

上田：こじんまりと楽しいのをやらない？って，ツーリズムでいく？とかオタクでどう？とか，『虹色のトロツキー』（注：安彦良和による満洲国を題材とした漫画，1990年から96年に『月刊コミックトム』にて連載，単行本全8巻は潮出版社から発売）とか，って話をしながら，話を振ってみたいしつつ，実らないままっていう。

原田：なるほど，逆にいうと，満洲を舞台にした漫画についての研究はそれほど進んでいないということなんでしょうね。そうすると，今日の座談会のテーマというか，裏テーマといったほうがよいでしょうが，『ファイチンさん』の理解を深めるとともに，問題提起みたいな話しを進めることも重要になりますね。そのあたりは少し意識しながらお話を伺ってほしいと思いますが，ところで，『ファイチンさん』以外にも満洲を描いた作品は存在しているのですか？

坂部：満洲を題材とする漫画で，すぐ思いつくのはさっきの安彦良和の『虹色のトロツキー』で，彼は何部作かで歴史ものを書いてるんですけど（注：近代史に関連した『王道の狗』，『天の血脈』など），（私も全部読んでるわけじゃないですけど）『虹色のトロツキー』は（満洲国の建国理念の）「王道楽土の夢」みたいなことを正面切って語る。で，モンゴル人の男の子が主人公で出てくる話なんですけれども，そういう表象のされ方とか，が非常に象徴的で興味深い。もうひとつ，私が最初に調べてた時に面白かった物語に，竹宮恵子が描いた『紅にほふ』（注：竹宮恵子の漫画，大正から昭和にかけての満洲への移民を題材とする，1994年から95年に『ビッグゴールド』にて連載，単行本3巻は小学館から発売）っていう満洲ものの女性移民の話があって，置屋の娘と，開拓団に嫁に行った，あ，違うな。置屋に売られて結局僻地の炭坑へ働きに行った人の嫁になった娘

と、あと…

上田：竹宮恵子のおばさんなんだよね？

坂部：芸者さんだった人との3人の女の子たちの群像をかいている。で、絶対身内だと思うんですけど、おばさんなのかな

上田：そう書いてたはず。

坂部：うん、実際、竹宮恵子的な戦後生まれのイラストレーターの女性が語り手で、おばさんたちの話を聞き取るっていう構成になった、それもよくできた話です。引揚者の語りとしてはいろんなバリエーションを女性の視点で書いている。それも敗戦以降どういう風に戦後の人たちがそうした経緯を見るのかっていうのも踏まえて描いてるっていう面白い漫画で、そういうのが、満洲の漫画ということに関しては、一つのイメージとしてわたしにはある。探せばもっとたくさんあると思うんですけども、何て言うのかな。漫画としてすごく作品としていいなって思うのはそれだったんです。けれどそれよりずっと前に、もっとリアルに中国を、満洲を表現した作品があったんだったっていうの知らなくて。1960年代ぐらいかな。

上田：そうですね。

坂部：57年から62年に書かれてたっていう。これは満洲表象として、中国表象としてかもしれないですけども、非常に面白い作品だなと思って。ぜひ漫画好き、中国好きの人とこれを語りたいっていうのがひとつの出発点です。

上田：そうですね。

原田：齋藤先生もこの辺の漫画をご存知だったんですか？

齋藤：私は知らなかったです。中国から引揚げてきた漫画家たちがいるってことは知っていましたが、けれども、『フィチンさん』は全然知りませんでしたし、全く勉強不足ですね。

【上田としこの位置づけ】

原田：竹宮恵子と上田としことは同時代ではないですよ。

坂部：そうですね。

上田：戦争体験や、引き揚げ体験を漫画家たちが語る本（注：中国引揚げ漫画家の会編、『ボクの満洲——漫画家たちの敗戦体験』，亜紀書房，1995年）がでていて，それに上田としこが出ていたんですが，上田としこって知らないなと思っていたんですよ。どんな漫画描いているのかわからないまま，上田としこという漫画家は引き揚げ者だっていう情報だけが頭に入っていました。Amazonで村上もとかの『フィチン再見！』を勧められ，上田としこの名前を思い出し，どんな人か気になって…そこから芋づる式で出てきたので買った，っていう流れなんですね。この上田としこって赤塚不二夫と相前後してなくなっているんですけども。

原田：なるほど。少し上田としこに焦点を当てて話を進めましょうか。年齢的には手塚治虫より上？

坂部：手塚治虫よりちょっと上ですよ？

原田：『フィチン再見！』を読むと，手塚治虫がかなり上田としこを頼っていたみたいに描かれていますね。

上田：手塚は11歳くらい若いって書いていますよね。長谷川町子も彼女より若いし，上田としこは結局90何歳まで生きているので，他の人は60代で亡くなっているから，そういう意味では長生きしていますね。

坂部：戦争とか植民地，満洲の時代を直接生きた人たちが書いたというのがこの世代の漫画で，さっきいていた安彦良和とか竹宮恵子とかはその次ですよ。

上田：この世代は聞き取りをしてかいた漫画ですね。上田としこは引き揚げ体験しているんですって？

坂部：お父さんが捕まるシーンがあった。

上田：引き揚げしてますね。実は，坂部先生と一緒に書かせてもらった『「満洲」——記憶と歴史』という本で，ハルピンの日本人が引き揚げできるまでの1年間を追っかけた論文を書いたことがあります。（注：上田貴子「哈爾濱の日本人——1945年8月—1946年9月」，山本有造編著『満洲——記憶と歴史』，京都大学学術出版社，2007年）

坂部：うん。

上田：そこで取り上げた満洲で暮らした日本人のうち、都市民は経済的に豊かだったということや、ハルピン暮らしの長いハルピンっ子たちの引き揚げ体験や、その後の暮らしなど、ある程度モデルストーリーと合致するなと思っています。

原田：『フィチン再見！』では、ハルピンで共同生活みたいな、みんなで助け合いながら生きていた描写がありました..

上田：そうですね。

原田：あれは歴史的にはほとんど間違いがないということですか？

上田：そうですね。経験に基づいていると思います。

原田：それは帰ってこなかった、いや帰らなかったのか。とりあえずそこにしようとしたんですか？

上田：戦争が終わって、ロシアが入ってくる。街がロシアに制圧されて、それでロシアから引き継がれるように八路軍が入ってくる。ロシアは八路軍に権力を移譲させていくという流れになるので、ハルピンは国民党側の勢力下になることもなくて、そのまま八路軍の下で引揚げ工作が始まるんです。で、引揚げ工作自体は、アメリカと八路軍との交渉が行われ、引揚げ作業が始まって、結局1946年の秋に引揚げられるようになるんです。上田としこはその引揚げ船に乗って帰ってきたんですね。

原田：上田としこは、ずっと前に帰っていたような印象を受けました。

上田：『フィチン再見！』によれば、このお父さんが横浜正金銀行にいて、その後中国人と合弁で船の会社、松花江の航運会社の経営をしたってかいてあったので、そこは多分資料で追えるはずだと思うんだけど。

坂部：人名録とかそういうの探せばということ？

上田：「ハルピン会」とか「長春会」とか、引き揚げしてきた人たちの満洲での居場所ごとの団体があるんだけど、ハルピン会の会誌が全部国会図書館にあるので、あそこを探ったら多分出てくると思うんですよ。彼女のお父さんが関わった話の裏もとれるかもしれないと思うんですよ。誰々はどうなったとかいうような話がたくさん出てくるので、地元の経済的な有力者だった

ようですし，上田としこのお父さんも探せば出てくるんじゃないかな．ある程度は．

坂部：さすが歴史家．資料で．ちゃんとしてくる．

上田：行間を詰めたくなる．隙間を文字で詰めたくなる．探せる限りはね．

坂部：でも探せるとなると，漫画研究の夢が広がる．

上田：安彦良和さんの『虹色のトロツキー』も最後に安彦さんが聞き取りした方が出てきていました．また登場人物としても岡村さんという方が登場していて，写真提供もうけていましたね．その人自身と付き合いがあったかもしれないというブリヤート人の方とは大阪外国語大学の大学院で一緒でした．『虹色のトロツキー』の主人公，ブリヤート人だった．

坂部：あ，そうか．

上田：モンゴルとして話はでてくるけれども，ブリヤートだったと思うんだけど．そういえばいま安彦良和が連載してるの，ザバイカルの話でしょ（注：安彦良和『乾と異－ザバイカル戦記』，2018年から『月刊アフタヌーン』で連載中．シベリア出兵に関連する作品）．

坂部：うん．

上田：ブリヤートとかザバイカルとか．私まだ読んでないんだけど．

坂部：私も読んでないんだけど．

原田：ところで、『ファイチンさん』は，上田としこの創作ですよ？

上田：創作ですね．ある程度は．

【国際都市ハルピン】

原田：中国人の一人の少女であるファイチンさんを主人公にした意図はどこにあるのか，とついつい考えたくなります．言い換えれば，今言われたような上田としこ自身，多くの体験をしてきているわけですが，中国人の少女を中心に据えた意図をどのように理解すればいいのでしょうかね．

上田：私にとってのハルピン引き揚げの論文を書いた時の、インフォーマントの方は70代で亡くなったんですけど、杉山公子さんといって、ハルピン経験、引き揚げ経験、ハルピンの日本人についての回想録的な本をだしてらっしゃる方だったんですよ（注：杉山公子、『哈爾濱物語——それはウラジオストクからはじまった』地久館、1985年など）。『フィチンさん』に描かれるハルピンは、その方の語りの中にあったハルピン像と合うんです。杉山さんのお父さんが戦争より前にハルピンに入っていて、農機具商をずっとやっていた方で、雇ってるのは中国人ばかりで、ビジネスの相手にも中国人や、朝鮮人もいた。さらに杉山さんの祖母にあたる方はハルピンに一番最初に入った日本人のグループの一人だったから、日本語の標準語は喋れないけれどもロシア語と中国語と天草弁はバラバラっていう話も聞いていました。

杉山さんはフィチンさんと似たような年頃だと思います。その方の語りとフィチンさんの物語は割とかぶるんですよ。例えば、中国人の大金持ちで、傅家甸（フージャーデイエン。注：ハルピンは植民地都市で、ロシア人や日本人が住む地域と中国人が住む地域とがあった。ハルピンの中国人街の一つ）でデパートをやってる大金持ちがいて、それが町の名士で、というのは杉山さんの語りの中でも出てきました。私自身も、その傅家甸での百貨店経営者のことも調べていたので、「あーこの人のことですか」って杉山さんにきいたら、「そうそう、その人でね」って杉山さんが話してくださったりしたんですよ。だから当時ハルピンにいた日本人の大人の社会の中では、地域社会における著名人は民族関係なく大人達の話には出て来たし、噂話は出回っていたんだろうなっていう印象があるんです。だからそんな噂話の登場人物が、この男の子のお父さんのイメージだろうなって推測しながら読んでるんですよ。

原田：なるほど、あいつは中国人で、あいつは日本人だっていう、そういう民族的な感情よりも、もっと国際的な感覚だったんだろうということですね。

上田：という持論ですけどね。

原田：国際的な感覚を読み解くというのは、興味深い視点というか、その歴史を知りたくありませんね。

上田：戦前からハルピンにいる日本人グループ、満洲国ができる前の日本人のグループは、ハルピンっていう新しくロシアが作った街の中で生活しているという意識もっていた。ロシア人が作ったロシア人が一番大きな顔をしていた町であるハルピン。次に、ロシア革命の後、ロシアの勢いが落ちてきた時に、中国がのし上がってきた。けれども満洲事変で、次は日本人がのし上がったという具合に、リーダーシップをとるグループが順番に波のように変わってきたという感覚です。満洲国ができてから入ってきた日本人達っていうのはちょっと、何ていうのか、その波を知らないから、そんなに国際的なセンスはないんですけども、一番初めのロシア人がつくっ

た時に入ってきた日本人は、ロシア人がトップにいる中で、中国人とも切磋琢磨しながら、その街の中で成功していくっていう、すごい冒険心溢れる人たちなので、彼らにとっては中国人かロシア人か日本人かっていうよりは、一緒にビジネスでのし上がっていく味方であり、ライバルでありっていう感覚だったんだらうなっていう。

原田：上田としこのお父さんは、戦前からハルピンに在住していたわけですね。

上田：横浜正金銀行勤めで、戦前からですね。

原田：そういう国際的な感覚を上田としこも身に着けていたということなんでしょうね。

上田：多分。だから、『フィチン再見！』に、彼女が高等教育を受けるために日本に帰ったものの、1938年20才でいったんハルピンに戻り、さらに絵の勉強するために、一人で日本に戻ってきた際に、戦時下の日本の空気になじめずにいるんですね。パーマを当てたりとか、真っ赤なレインコートを着て街に出て怒られたりする中で、ストレスを感じてるんだけど、それはハルピン帰りの方達を感じていたりとか、台湾からの引揚、台湾生まれ台湾育ちの人たちが語る、自分が日本に馴染めないという感覚ともすごい通じてて。だから彼女自身が幼少期をハルピンで過ごしたことによって、持っている感性っていうのはこの時代の、要は、外地生まれの日本人、外地育ちの日本人達にある程度共通するものなんだらうなって思いますけどもね。

原田：少し話を戻して申し訳ないのですが、九州から行ってたということだと思いますが、当時はやはり九州出身者が多かったのですか。満洲国ができる前に入っていた、ひと山当てようっていうのはあったのでしょうかね。

上田：長崎には航路があるんですよ。長崎—上海航路がありましたし、長崎からウラジオストクまで行く航路もあったようです。先ほど名前をだした杉山公子さんの親戚の方は天草出身で、ハルピンの前にウラジオストクに入ってるんですよ。ウラジオストクでお仕えしていたご主人について来いって言われて、ハルピンに移ったという経緯のある人なんです。だから日本語の標準語よりロシア語の方が達者だったっていうことらしいです。

原田：船でウラジオストクまで行けたんですか。

上田：そうそう。

坂部：からゆきさんとかってのはちょっと違うけれども、海外移民の伝統がある場所っていうの

は九州は確かにそうだし、多分例えば、東北とかからはあんまり直接的にはそういう所に行くってというのは少なかった。国策になって開拓団に出るようになったら行くんですけども、それまでに自由に動くっていうのは、トップエリートは行くんですけども。

上田：方言みたいなものしか喋れないような人が行くのはやっぱりね。

坂部：だからそういう所に行く人は何らかのチャンスを見つけて移動した人っていうのはいるんだろうなっていうのは。

原田：なるほど。長崎—上海はメジャーだったと聞いたことがあります。ただ、ウラジオストクまでの航路は初めて聞きました。

上田：ウラジオストクとハルピンの結びつきの方がハルピンと奉天とか大連とかよりも強いですよ。もともとロシアがウラジオストクつくってからハルピンを建設するんです。

坂部：鉄道のあれだもんね、流れだよな。

上田：そうそう。

原田：なるほど。時代的にいうと明治ですね。

上田：明治です。多分その明治か大正かっていうよりか航路ができれば動いちゃうんですよ。ウラジオストクに行っていた華僑のことを以前調べていたんです。ハルピン、ウラジオストクにしている華僑っていうのは、山東半島の辺りの出身の人が多いんです。やっぱ海が近くてそれこそ天草の人達と似てるノリなんだと思うんですけども、海が近いから船に乗ってちょっと遠くに行って出稼ぎに行くっていう。一攫千金、商売しに行くっていう人が多い地域なんです。中国の方のネットワークをずっとやっていたんですが、同じように天草の人も動いているよねっていうことで、ルートとしてはロシア系の船で山東、日本、ウラジオストクっていうのがたぶん繋がってるのかなっていう印象です。

原田：多くの日本人が船で大陸に渡っていたわけですけど、中国からも日本にも来てたわけですよ。

上田：中国からの華僑の存在はありますが、一旗あげたいという中国人にとっての当時の日本っていうのは、いうほど儲かるところでないので。

坂部：うん。

原田：そうですね。

上田：はい。貿易をするなら儲かるけど，単純労働者としては受け入れてません。むしろ極東ロシアのほうが一攫千金の可能性があったのでは。

坂部：うん。ロシアは貿易商がたくさんいたし，きてたし。

上田：ロシアの極東進出で建設ラッシュだから労働者もほしいし。

坂部：うん。

上田：労働者の元締め的な人と，労働者の衣食住を賄うような貿易系の人とがウラジオストクの中国人の特徴でしょうか。

原田：それは中国人も日本人も元々は労働者が多かったということなんですか？

上田：はい。

坂部：それこそシベリア鉄道の建設の工夫として日本人も中国人も朝鮮人も。

原田：みんな一緒に働いていたということなんですね。

上田：うんうん。

原田：ロシア革命の前の話ですよ？

上田：そうです。それこそ（名古屋大学の）サヴェリエフ先生の研究ですね。

坂部：ですよ。ウラジオの話を書いている（注：たとえば，サヴェリエフ・イゴリ「帝政期極東ロシア地域の諸民族の交流と生活」，姫田光義編『北・東北アジア地域交流史』有斐閣アルマ，2012年など）。

上田：本あるよね。サヴェリエフ先生は，ウラジオのそういう諸民族の入植の話を書いてらっしゃる。

原田：齋藤先生、このウラジオストクの話はご存知でしたか？

齋藤：勉強になりますね、ウラジオストクから入っているのはなるほどなって、人の移動があるっていうのは知ってましたけど、生活とか言語とか、建築とかもそうだと思うんです。ウラジオストクから物とか、文化とか思想が入っているということがよくわかって、いつも南から物事を考えちゃいますけど、西とか北からもやっぱりあるんだなっていうのがうかがっていておもしろいって感じました。教科書にそういう視点ってほとんどとか、まったくないし、日本史の研究とかどうなんだろうな。あんまり入植・移動っていうところでももちろん出てくるとは思うんですけど、まして、航路って思った以上に古いんだなと思って、20世紀入る前からあると思うんで。

坂部：鉄道が港に繋がって、いろんな流通とかに繋がって、だからハルピンは、東洋のパリだったわけですよね。あまり一括りにしてはあれだけど、ある種のコスモポリタンなカルチャーがあってみたい、記憶をみんながすごい語っている。実質、実体的な庶民の生活っていうのが、人々の生活がこんな感じだったのかなっていうのが垣間見られるのがフィチンさんの情景。

【漫画のなかのハルピン】

原田：そうですね、『フィチンさん』を読むと、人びとの生活が理解できます。

坂部：だから当たり前のようにロシア語も話すし、中国語も話すし、日本語も喋る。

上田：クレオールな言葉を話すじゃないですか。

坂部：そうそう。

上田：ロシア語と中国語と日本語がちゃんぽんな喋り、特に上巻なんかいっぱいエピソードがあるから。ハルピン子の方たちは実際にそういう喋りをするし。単語の中に中国語いれて喋られるから。

坂部：私一番初めに読んだときに面白かったのが、音で覚えた中国語をかいているなって感じが。私らが文字で学ぶと、漢字とピンイン表記じゃないですか。

上田：そう。

坂部：（正規に発音習っていると）「トゥイプチー」（というカナ）ってかかないんだよね。

上田：「qu」（去）が，

上田・坂部：「チュイ」ってかいてあるよね。

原田：そうそう。

上田：日本人，「qu」を「チィ」ってかくから。

坂部：そうそう。

上田：なのに，「チュイ」ってかくから，いい耳してるって。

坂部：そう，そう！絶対耳で覚えた中国語だと思って，「ナービエンチュイ」（那边去）っていうメモがここに書いてある。

全員：笑

坂部：それで「ホンフーズー」（紅胡子）なんだよね，今中国語でいえば，でも多分「ホンホーズ」って聞こえるんだよね，赤い髭っていう意味のあれだけど。

上田・坂部：馬賊の言葉だけど。

坂部：だからそういうのがそのまま。

上田：そうそう。

坂部：そして当たり前のように，「你来了」っていうのもさ，いらっしゃいっていう意味，直接ちゃんと訳していると，いらっしゃいってかいてあって，「来たのね」っていわれているなって思いながら私は人の家を訪ねてただけど，「あ，いらっしゃいなんだ」って思いながら。

全員：笑

坂部：その訳とかの結びつきも関心して見ながら，それが本当に日常的に当たり前のように。

上田：そうそう。

坂部：やりとりしている。すごく単語レベルのところがあるけれど。

上田：なんかクレオール中国語というか、当時のハルピンのクレオールな言語空間のなかの中国語として、当時の人たちのハルピン語みたいなのがある。

坂部：そうそうそう。

上田：だから「吃饭了吗」でいまの中国語の教科書は、こんにちはこの意味だとかおはようございますの意味だとかかいてるけど、『フィチンさん』では「吃饭完了吗」と書いてる。そういうば、「完了吗」もありだよなって、でも教科書ではいま、「吃饭完了吗」は書いてないよなって思いながら読んでました。

坂部：ん。「吃饭完了吗」だって、私らが習った時の教科書は、こんにちはこの表現だったけど、いまはもう違うじゃない？食べれない時代じゃないから。「吃饭了吗」っていうのを出会った時の挨拶言葉として使わないんだよね、今の人は。

上田：やっぱりね。

坂部：私一回だけ田舎の方に車でいって、降りて、紹介してもらった人に会ったときに、おばさんに「吃饭了吗」って言われて、直接そのまま受け止めちゃって、「还没有」っていったら、すぐ食べに連れていかれたことがあって。

全員：笑

上田：それだ。昔の話だよ。

坂部：ん。あ、「吃饭了吗？」って言われたら、「吃饭了！」って言わなきゃいけなかったんだと思ったことがあったんですけど、そういうのが生きている時代ももう終わり。終わっている、中国でも。

上田・原田：うん。確かに。

坂部：その時代にも、ね。

上田：うん。

坂部：そんなリアルじゃないっていうのがよくわかる。

上田：うんうん。

坂部：言葉の感じがすごくおもしろいなって。

【連載当時の日本社会の雰囲気】

原田：中国語を理解している日本人が読むと，そういう楽しみ方もできますね。もちろん，上田としこが実体験に基づいて描いているからよりリアルな感じが伝わるわけだけど，ただ，この漫画が日本で流行った頃，当時の日本人が中国語を理解できたのかな。今，ここで話しているような話を当時の日本人もしていたのかな？とってしまいますね。

上田：でも下巻のあたりだと中国語単語講座っていうのをちょっと入れたりしてるよね。あと引揚者が絶対に読み手にいるよね。引揚経験のある人たちの読者層が一定数いたのかなと思いがら読みました。

坂部：ああ。

原田：なるほどね。

上田：とみてますね。でないと，きっと面白がらないだろうなって思うし，だから腑に落ちるっていうか。あとはやっぱり中国へのイメージを我々はどこかで書き換えられてるんだと思う。60年代ぐらいの中国国交回復前の中国観，これは引揚者と，それから戦前中国に行ってる人がつくった，あるいは台湾から来てる人達がつくっていたというような環境だったはず。だから，60年代の日本人が持っていた中国観を私達はもしかしたら，誤解してるかもしれないなって思っているんです。私が参加している神戸華僑華人研究会で聞いた話なんですけれども，神戸華僑に対して，戦後に大陸側と台湾側が取り込もうとゴタゴタとしている。そのころに神戸華僑は自分達の小学校を作りたいっていう，学校をつくる運動をする時に，神戸市がサポートするんですよ。兵庫県と神戸市が協力的なんですよ。で，その時の神戸市，兵庫県の姿勢っていうのは，日本の今の行政とは全然違っていて，だからあの頃の華僑に対する意識っていう，市民社会が持ってる中国系世界に対する感覚っていうのは違う気がする。国交回復直後の日中関係も蜜月期っていわれて，すごい憧れている中国にリアルに触れられて嬉しいってなり始めて，加熱していく。で，今は逆にすごく冷たくなってるってのがありますけれども。あの時代は国交回復前の加熱前のような，ほのかに中国に対する思いが伏流水のようにあって，中国に対する評価が高い。ノスタルジーというか，失ったものだから価値が高いみたいな感覚があるんじゃないかな。日本のどの層

なのかよく分からない、インテリ層なのか引揚げ層なのか、どの層なんかわかんないけれども、あるような気がするんです、私。

原田：なるほど、『フィチンさん』を読んで疑問というか、今の日本人が持っている中国観とは明らかに違う日本人の存在を感じます。そこがすごく不思議です。だから話を少し戻すと、上田としこが描いた中国（というかハルビン）を受け入れていた日本人がいたわけですね。今の日本人では決して受け入れることができないでしょう。この違いがすごく重要ですね。上田先生が言われたようにどこかで変わったかという問題提起も含めて、確かに72年以降、みんなが中国に行きたいという感覚とは違う中国像があったようですね。もちろん、それが何かは分かりませんが。

坂部：80年代ぐらいに日本が東アジアのリーダーになろうと思ってなんかいくつかやろうとして、結局失敗して、もう東アジアから撤収してるっていうような感じになってきているような気がするんですけれども。私が現代として知ってる限りでいえばね、その前の時代の中国に対するある種の親しみとか、ある種の尊敬とか、これとつなげていいのか悪いのかだけど、中国に対するロマンとか、大陸に対するある種のロマンみたいなのを戦前にも、それこそ内山書店の人とかね。なんか色々あったと思うんですよね、いろんな形で。それを正当化するつもりは別にないけれども、日本人の中でそういう感情っていうのがあったっていうのはあるっていうのと、それからもう一つ、さっき上田さんが言われたところで私がすごく大事だなんて思っているのは、ちょうど今私の学生の劉コウ君が、引揚者を戦後日本社会がすごく見えないものにしてしまっているっていう研究をしていて、満洲から引揚げしてきた人って、戦後直後帰ってきた民間人だけでも百数十万いるんですよ。兵士とかそれから満洲国があった期間に出入りしていた人を含めるとたぶん300万とかそのぐらいいるはずですよ。それはその当時の日本人の人口って6000万とかそのぐらいしかいないから、結構な割合の人たちが満洲を知っていて引揚げてきている。これだけ多様で国際的な体験を、見ないことにしてしまっているかなっていう感じがして、ただそこから引揚げてきてる人にとって、出てくる言葉とか、中国人の生活習慣とかそういうのってすごく懐かしい。よくわかる感じだと思うんだよね。

上田：最近、骨董品屋さんに興味持って調べているんです。要は東洋美術、絵画もそうだし陶磁器もそうなんだけれども…。中国の美術に対して、戦前の日本がパトロンとして存在しているみたいなんです。こういう研究を呉孟晋という、京都国立博物館の学芸員の方がやっているんです。彼が、取り上げている、須磨さんっていう人のコレクションが、京都国立博物館にあるんです。呉昌碩とかを始めとして、中国絵画をいっぱい買ってるし、若手の売り出し中の人達の作品を買ってパトロンとしてサポートしてたっていう日本の外交官がいたんです。それ以外にも、関西の財界って中国絵画をいっぱい戦前に買ってるんですよ。大阪市立美術館がたくさんもって

ます。あとは住友が青銅器を大量に買っています。銅山経営やっていたせいかもしれませんが、青銅器のコレクションがあるんです。戦前に日本にそうやってたくさんの中国美術が入ってきて、それを集めちゃう日本人のメンタリティって、やっぱり中国文化に対する憧れがあったんでしょうね。それを戦争が終わった後維持ができなくなるところもあるんですね。維持できなかった人たちが市場に出したようですが、面白かったのは青銅器に関しては、戦後に活躍した坂本五郎さんという古美術商が、青銅器買い集めて、奈良の国立博物館に寄贈しちゃうんですよ。ほかにも散逸しかけたものを再収集したりする美術館があったりする。国交回復の前夜ぐらいから、戦略的にそういうものを狙って集めたりする美術館が出てくる。静岡県立美術館とか福岡のアジア美術館の前身の福岡市美術館とかがそういうのを始めていく。それを集め、それが館の特徴の一つになると思う、そのメンタリティはやっぱり戦前からくるように思います。大陸の文化に対する憧れとか、意味があるっていう価値観があって、それがやっぱり伏流水にあって、ずっと出てきた時期が、静岡県立美術館とかが頑張りだした時期なのかなって議論を院生としたっていうことがありました。その戦前の憧れがあって、それが戦後維持できなくなって崩れたけれども、やっぱり好きっていう気持ちが抑えきれないから1970年のちょっと前ぐらいから表にでるっていうのはあると思うんです。この中国に対するやっぱりいいよね、って感性が70年代80年ぐらいまでにはきっとあったと思います。さらに、国交回復前はリアル中国を知らないから、もっと美しく見えていたんだと思うし。

原田：なるほど。

上田：共産中国にいられなくなって亡命してる人もいるから、そういう人たちは結局共産中国と相容れないような、文化的な素養があったりする人たちだからこそ、彼らは余計日本人のノスタルジーに応えるような中国像を見せてくれるし、ということもあるんじゃないかなって思うんです。だからここに出てくるお金持ちのリウタイさんっていうのは、60年代日本人の持っている中国人のいわゆる「大人（ダーレン）」のイメージをもっている気がする。

原田：確かに。

上田：面白いよね。お婆さんがいたりとかね。

坂部：そうそう。

原田：普通にね。

坂部：すごい典型的な。

上田：典型的な、ドラマに出てきそうな。

原田：でも、あんまりドロドロしているわけではないですよ。

坂部：うん。

上田：そう。そうだよっていう。一人目の奥さんは枯れた感じのしっかりしたような…

坂部：そう、必ず年上でしっかり者で。

上田：一番若い奥さんは派手好きで金遣いが甘いような、困ったちゃんでっていう。

坂部：なんかよくある話みたいな。どこかでテレビで見たいな。

原田：ところで、少し話を戻すと、満州と関わった日本人についてですけど、おおよそどのくらいの規模だったのですか？

上田：坂部先生がさっき言っていた劉コウ君がやっている満洲とか引き揚げとかそうだけれど、その前に、引揚げより早い時期に、運よく帰ってきてる人とか、いわゆる高等教育を日本で受けなくてはいけなくて日本に移動して、(戦後の)引揚げに巻き込まれずに帰ってきてるとか、それこそ転勤で一時的に満洲で働いていたけど、日本に帰ってきていて、45年の段階ではもう日本にいたとか、そういう人も含めると満洲経験者は100万よりもっと多いはずだよ。

坂部：そうそう。

上田：戦後すぐの引揚げ者の総数が350万人くらい、日本人の中では満洲経験者がもっと多いから…

原田：その数は民間ですよ？民間も軍人も官僚も含めての数ですか？

坂部：いや、満洲からの引揚げは民間だけで100万人くらい。600万人は他の地域からの引揚げと兵士の帰還者を含めて。

上田：そうそう。

坂部：軍隊いれるともっと，満洲から戦後すぐに引揚げてきた人たちは，両方合わせて 200 万人ぐらいだから数としてはすごいと思う。

原田：すごいよね。

【異文化経験者としての日本人】

坂部：すごいんですよ。600 万人か，当時の日本人人口の割が引揚げてきてるんですよ。あちこちから。それも軍事も含めて。その中の 1/2 とはいわないけど，1/3 以上が満洲なので。数としてはやっぱり非常に多い。で，そういう人口の割が敗戦の時点で海外にいて日本の国外にいていろんな体験とかを経験値を持って人たちのそういう雑多なもの…

上田：すごくいろんな異文化経験をしたことがある人の割合が今より多いよね。

坂部：そうなの！圧倒的に多かったと思うんだけど。それがなかったことにされてるっていうのがものすごく。で，単一民族神話じゃないけれどもそういう形で，それまでと異なった日本の国家統合，国民統合の論理をつくっていかうとしたらうっていうのが，今振り返ってみると気持ち悪いっていう感じがする部分があります。だから引揚者の人たちって，結局日本のナショナリズムに巻き込まれていく。この引揚者の物語でも一番有名なのは，藤原ていの『流れる星は生きている』（引揚げの回想録。初版は 1949 年に日比谷出版社から刊行。その後何度も文庫などで再版され，また映画やドラマにもなった）とかですが，帰ってくる時はすごく艱難辛苦や逃避行があって，その物語をどうやって家族が一丸となって帰ってきたのか，みたいな語りでまとめちゃうんですよ。それは戦後日本社会の中で生きていく中で結局そのそういう家族の物語が一番許容される，受け入れられる物語っていうことだから。そういう風にまとめていってしまう。それを引揚げ記録や体験記の研究の中で，成田龍一さんは，本来はトランスナショナルな経験，植民地の秩序が転倒して，支配者から転落したそういう経験も全部含めて体験した人たちなんかも，ナショナルな物語に回収されていってしまう，という風に引揚者の記憶を分析してるんですけど（注：成田龍一，『『引揚げ』に関する序章』、『思想』955 号，2003 年）。ある程度確かにそういう傾向はあって，私らが聞いたのも苦難の，日本人としてどうやって苦勞してきて帰ってきたのかっていう語りをする人は多いと思うんだけど，そうではなかった可能性っていうのも，別に植民地を肯定するとかの意味ではなくて，もう一回そういうところに目を留めておいてもいいのかなって思っています。だから劉コウ君の研究とかもそうだし，帰還移民っていう意味では人類学的な視点からいえば，近代化によって人は移動するわけですよ。そこからいろんな形で元にくるところに戻ってくるっていう帰還移民ってよんでるんですけど。

原田：あ，帰還って戻って来って意味なのね。

上田：引き揚げではなくてね。

坂部：そうそう、その大きな流れの中の一つとして、植民地からの引揚げがある。植民地もいろんなレベルのものがあって、この間から蘭信三先生たちの研究会でいろいろ考えさせられているけれど蘭先生たちの『引揚・追放・残留』（注：蘭信三・川喜田敦子・松浦雄介編、『引揚・追放・残留——戦後国際民族移動の比較研究』、名古屋大学出版会、2019年）の本では、ヨーロッパの、例えばドイツ人は戦後追放されるんですね。ヨーロッパのいろんな地域から本国に戻される。で移民の交換とかもあったりする。フランスとかイギリスとかの戦勝国は、植民地を辞めた時に脱植民地化する時に引揚げを経験する。それはアルジェリア戦争みたいに戦争になることもあるし、段階を踏んで引揚げられていくこともある。日本の敗戦と植民地を失っての引揚げというのは、それが両方をともなう体験っていうところはあって、つまり敗戦処理、兼、脱植民地化っていうところはあるので、その日本人にとってはサンクションがすごく厳しいものがあるわけなんですよね。それは単純にももちろん肯定できないってのはもちろんその通り。ただ当時、台湾とかを含めていけば、100年とまではいわないけれども、本当、数十年間の海外体験っていうものをどうやって日本の歴史の中に残していくのか、織り込んでいくのかってというのが、もうちょっと考えられてもいいのかなって。っていうのを考えさせてくれる。

上田：『紅にほふ』を読んだ時に、竹宮恵子の存在とかもまさか引き揚げ者の2世だったのかっていうおどろきがあった…。竹宮恵子の別の漫画で、『天馬の血族』（注：竹宮恵子の騎馬民族を題材としたファンタジー漫画。1991年～2000年にかけて『ASUKA』に連載。単行本24巻は角川書店より発売）っていう物語があって、完全にファンタジー世界をつくってあるんだけど、でも中華思想の話なんです。『天馬の血族』に織り込んだ中華思想のセンスがすごくいいので驚いたんです。で、『紅にほふ』の引揚げの話を読んだ後に、なるほどねって体感的にある程度わかっているんだなこの人、大陸っていうものが、っていうふうに思いました。上田としこの漫画の素材ははっきりハルピンだから、満洲経験がセンスとして表面に出てくるんだけど…。ちばてつやの作品も読んだら出てくるのかな、満洲体験のセンスの良さみたいなものが、どこかで出てくるものがあるのかなとか。赤塚不二夫とかもそうなんだけれども、っていうのがふと気になりましたね、そういう意味では。

原田：ちばてつや、赤塚不二夫とか。このあたりは出てきてない？あえて隠してるような、そんな気がしないでもないんだけど。あんま出てこないですね。

上田：でも画集（中国引揚漫画家の会『もう10年もすれば…』今人舎、2014年）が出てきたあたり、老年期に入って色々ではじめる。だから竹宮恵子が『紅にほふ』をかいたのもそういう流れなのかなあと。

原田：そうなんだ。

上田：大成して自分が大家になってからやり始めるので。

原田：なるほど，だから確か赤塚とか上田としことか，一緒に中国にいますよね。

上田：旅行記もありますよね。

原田：画集も出てきた気がするんだけど。

坂部：ある意味不条理さみたいなものとかそういうのを…

原田：赤塚の根っこには中国的な発想があったから，なかなか日本社会に受け入れられなかったから，酒を飲まずにはいられなかったという面もあると思うんだけど，赤塚の生き方をみると，世に出て行く時には，とくに中国の話しが表立っているわけではないのかなって思うんですけどもね。

上田：まあそうですね，赤塚は子どもだった，上田としこより若かったから多分リアルな生活体験ではなくてあんまり入り込んではないんだろうなっていう気がしますけどね。

坂部：本当のことというともうちょっと引き揚げ者の表象っていうので見れば安部公房とか小説とかの表象も，ものすごく大事なんだろうなと思うんですよね，ただそこまでフォローして論じる能力値がないから。

上田：そっちは研究蓄積どーんってあるでしょう。

坂部：そうそう，ある程度ね，日本文学の素養がないと難しいっていうのがあるので，直接全部を論じるっていうのはちょっと難しい。

【朝鮮，台湾を舞台とした漫画の存在は？】

上田：満洲漫画があるのに朝鮮漫画ないんだよね。

坂部：んー，そうか。

原田：いや，聞いたことない。

上田：メジャーなまでに行くような。台湾漫画も。台湾漫画はこの後出るかもしれないけれども、台湾引揚げ漫画なり、台湾漫画は日本人はかいてないよね。

坂部：だから満洲はある種のロマンティシズムみたいなものが張り付いてるような気がする。安彦良和なんか完全にそういうところがあると思う。ただ両面あるんだけど、それがリアルな部分と…

原田：さっき言われていた中国に対する憧れというものですか。

上田：日本人にとって台湾は中国の枠組みにいれていなかったのかもしれないね。南洋の入り口の枠組みなのかな。南国のイメージではあるけれどもね。中華文化圏だと思ってないんだろうか、日本人は、台湾を。

坂部：確かに台湾から日本描いてるものはあるんだけど。

上田：「海角七号」(注：日本語でのタイトルは『海角七号 君想う、国境の南』。2008年公開の台湾映画。日本統治時代が題材)とかね。

坂部：そうそう。先日読んだ学生のテーマで、そういうテーマでやってる子がいて、日本人にとっての台湾表象みたいなものって意外とあんまりなくて、司馬遼太郎の『台湾紀行』(注：司馬遼太郎の『街道をゆく』シリーズの40巻。1994年単行本発行)とかそういうものになっちゃうんだ、みたいなことを言っている。もうちょっとなんかあるだろうって思うんですけど。

上田：なんでだろう。逆に今って台湾研究って…、研究対象に台湾ノスタルジーを扱っているひともいるけどもね。満洲研究の方が冷静でなければいけないところがすごいある。現地に行くと、すごいバッシングに耐えながら生きなくてはいけないので。

坂部：そうそう。

上田：9月18日なんか留学生宿舎に、中国人宿舎から火のついた瓶を投げられましたからね。当たらないようにだけでも。火炎瓶のつもりだったのかな。そんな圧をかけられ続けられてるから…(注：満洲国建国のきっかけになった満洲事変が、1931年9月18日に起きている。中国では「九一八事変」と呼ばれ、とくに東北地域では夜9時18分にサイレンを流すなど、記念化されたイベントが行われている)。旧満洲に行く留学生は。

坂部：タクシーなんか乗車拒否ですよ。18日は。

上田：そうそう。戦争責任をどう考えるかって一度は聞かれますし。そういうのに比べると、台湾は時々そういう人いるかもしれないけども、結構ウェルカムっていう感じで迎えてもらえるから…。今現在の台湾に関心をもつ人は、台湾のファンがいっぱい日本社会にいるんですよ。大陸のファンはすごい減ったけれども。

なので、これから台湾をテーマに台湾を日本が表象、表現していく、あるいは消費していくようになるかもしれないけれども。そう、多分台湾に対しては、これからあるかもしれない。満洲経験はこれまで消費してきたよね、割となががいこと。今もまた新しい漫画出てるしね。

上田・坂部：アヘンのやつ（注：門馬司（原作）・鹿子（作画）による『満洲アヘンスクワッド』のこと。2020年より『コミック DAYS』にて連載、次いで『週刊ヤングマガジン』で連載中）。

上田：まだ読んでないけれども。

坂部：まだ読んでないけど。

上田：やっぱ知ってる。

坂部：ちょっと絵がね。

上田：絵だね。あとアニメもあるでしょ。『ジョーカーゲーム』（注：柳広司によるスパイ小説。2008年から刊行。2016年にテレビアニメとして放映）も満洲でてるでしょ。『閃光のナイトレイド』（注：2010年に放送された日本のテレビアニメ）っていうのも満洲事変が出てくるし。

原田：齋藤先生はどうですか？

齋藤：今うかがってて朝鮮を描く漫画、満洲、台湾っていうのは支配の方法なり、歴史的に違うものがあるって生じているんだなって。今、子どもたちが朝鮮の学校とか満洲、台湾の学校、小学校、中学校くらいの子も子どもたちがどういう生活してるのかっていうのは調べてるんですけど、記憶が一番残っているのは満洲ですよ。朝鮮半島だとやっぱりどうしてもすごく差別的だったり。満洲国ってのが支配した軍事占領のやり方とか朝鮮と全然違うとやっぱり描かれるものも違ってくるのかなって。日本人が見るものも違うし、漫画とか小説とか描かれる内容も違ってくるのかなっていうのは、ちょっと感じましたね。

【満洲の本質】

坂部：引き揚げてきた人たち、満洲経験の者たちにいわせる、満洲だけは植民地として質が違ったんだっていうことをすごい一生懸命主張されるんですよ。満洲建国とか社会づくりに携わった人であればあるほど。

原田：支配者ではないって感じなんですかね？

坂部：じゃなくて、五族協和の理念をまともに受けいれていて、自分たちはその社会の一員として国をつくりあげていく、でもその背景にはもちろん日本の軍事力とかいろいろあったわけなんだけれども、ただそれを本気で信じて本気でやりたいと思ってた日本人ってのは結構いるので、社会全体が、完全に朝鮮半島とか台湾は日本領土だったので、そうではない形の社会ってのがあがる程度今植民地っていうひとくくりにしてしまうと質が違う部分ってのがあったらろうって思います。

原田：フイチンさんが通っていたのはキリスト系の学校でしたよね。

上田：セイシュン女学院。そのセイシュンはどの字を書くんだらうって思いながら、まさか青い春って書くんじゃないかって思いながら読んでたんだけど。

全員：笑

原田：当時、日本学校はあったのか？

上田：ありましたよ。

原田：別に植民地ではないから、日本人学校では日本語で授業をしていたのでしょけれど、満洲では日本語教育を徹底的にやっているわけではなかったということですね。

坂部：日本人の学校は日本語でももちろん全部やる。

上田：民族別の学校っていうか、日本の教育システムとしての日本人のための学校っていうのが基本あって、そこに中国人の子ども、お金持ちの子がいたりする。朝鮮の子ども達もいたりする。それとは別に中国人の子のための小学校っていうのが確かあったから、中国人のための中国のシステムがある。そこに日本語の授業はゼロではないと思うんだけど。

坂部：うん，あるある。

上田：その小学校で日本語で教育しなくてはいけませんっていうのは，創氏改名みたいなのはないので。

坂部：全部をそんなにやるだけの人材もいなかっただろうし，そこまでやれない。ただ学制が途中で変わるんだよね。新学制が37年ぐらいからできてきて，そこで総動員体制みたいなのが結構強くなっていて，ただ全部を日本語で教育できるだけの人材もないから，それまで満洲は全然いっていないんですけれども，日本の道德教育みたいなものをいれようという流れみたいなのはあったのかもしれない。ただ言葉としては日本人の学校は日本語で教育する。満洲国の大臣だった人の息子さんに長春で聞き取りをしたことがあるんですけれども，谷学謙（グーシュエチェン）っていう先生ですが，東北師範大学の日本語教育の基礎をつくった先生で，その人の日本語がですね，私たちの誰よりも美しい古典的な日本語で，すごい綺麗な言葉を話しておられた。だからその時代に日本人の最高教育を受けられるようなところにずっといて，結局敗戦になって，敗戦になった直後は中国語がしっかりできなくて，文革の時に結構叩かれてひどかったらしい。その後名誉回復して東北師範大学は日本語の教育の拠点みたいな学校だったんですけれども，中国中でその中で日本語学校を立ち上げた中核の一人になった先生なので。

原田：そういう意味でいうと，そこまで日本語を学ぶ，みんながみんな学ぶわけじゃなくて，エリート層を中心に学んでいたのかな。でも，フィチンさんの学校は格式があって，お金持ちの子どものための学校という感じでしたね。

上田：あれはどれかモデルがあるのかなーって。

原田：ありそうですね。

上田：女学校はあったかもしれないけれども，日本人は日本人の女学校に行っって。

坂部：そう。みんなそこに入ってるんだけれども，ヨーロッパ系のなんか…

上田：あるだろうね。

坂部：学校とか病院とか，一番初めに作るじゃないですか。そういうのはどこまでその当時あったのかっていうのは，残ってたのか。

上田：ロシア系はちょっと『セーヴェル (Север)』(注：ハルビン・ウラジオストクを語る会編集の雑誌)にてでているけど、そういえば中国系の女学校ってあんまりおさえてないなあ。最近ハルピンの都市史やってないから。

原田：いずれにせよ、学校教育で一つの価値観を植え付けているわけではなく、いろいろな学校が存在していて、バラバラの印象を持ちますね。

上田：ハルピンはバラバラでしょうね。全体としての日本の政策はかぶってはいるけれども、多文化都市だっていう特徴を潰さないようにという意識はすごくある。ロシア人に対しても中国人に対しても首に縄を付けられているけれども、ロシアらしさ中国らしさを生かしておくっていう形で、たぶん自由にされてるところはあると思うんですけどもね。

原田：なるほど。東北地方の人って日本語上手い人が多いと思うのですが、それは、台湾と同じように日本語教育をやっていたからとっていましたけど、間違っていました。

上田：あとこの本自体は戦後にかかっているから、日本の存在を抑えていると思うんですよ。この主人公の男の子の他にもう一人、大金持ちのイケメンの男の子が出てくるじゃないですか。

原田：出てきますね。

上田：労咳(注：結核のこと)か何かで結局アメリカに治療に行く子。あれ戦前だったら日本にいったらよね。

原田：そこ気になってました。何故、アメリカって？

上田：アメリカに行かせるのは、その当時の日本にとってのそういう行き先がアメリカだからってのもあるだろうなっていうのと、当時のハルピンにおいてもアメリカの存在はありだし、ロシア(ソ連)は当時豊かではないイメージだろうし、リアリティとしてアメリカだと嘘にならないねっていうイメージはあるから、アメリカなんだろうなって思いながら読んでた。

原田：なるほど。

坂部：だから日本の影響、張学良とか…

上田：アメリカに移住するし…

坂部：最終的にそうだし、友だちがいたりとかさ、そういうところのネットワークがあるっていうところがあるけれども、まあでも確かに戦前だったら日本だよな、やっぱり行くのはね。

上田：うん。

坂部：中国人の少女を主人公に描いていて、中国人社会の階級差みたいってというのがすごく上手に出ている。さっきのジャングイ（『ファイチンさん』の登場人物、掌柜、ご主人の意）ですよ。と、タイタイ（太太、奥様の意）と、門番とか屋台の道端でなんか売ってる人たちがいたりとかってというような。

上田：ジャングイが、自分は農民だったんだよっていうと、そうなのよ！そうなのよ！農民なのよ！私あなたのような人の名前知ってるわって、思いながら読みました！回想録を読んだことのある自分の知ってる大金持ちのおじさんに仮託してました。二人有名なお金持ちがいるんですよ。どっちかなと思いつつ、傳家甸に店持ってるから、武百祥っていう大羅新の経営者がモデルかなと推測しています。

坂部：そういうのがみえる物語ってすごく少ないよね。今となってはね。さっきの話で言うところと中国社会的なそういう構造に対して、出てくるロシアの人ってというのは結構貧しい感じ。多分満洲国期にそういう風に残った人たちってというのは、ロシア人でも比較的貧しい人が多かったのかとも思うんですけども。と、日本人社会の階級差ってのはこの本の中ではあんまり出てこないかなってのが。

上田：そうですね。だから朝鮮も出てこないんだよね。ハルピンにもまま朝鮮人の方はいるんですけども、朝鮮人は出てこないし、上田としこの聞いた噂話の世界の方が大きくて、ベースとして、彼女がハルピンで暮らした時間ってというのは、幼少期と…

原田：途中で日本に戻っていますね。

上田：それと、高等教育は日本だし、日本での出版規制のなか行き詰まって終戦まであと数年ぐらいのところまでハルピンに行ってるだけだから、日本人コミュニティの中に入ってないんだろうなって思って。だから小学生ぐらいの日本人のコミュニティはわかっていると思うけれども、ハルピンでビジネスをする場合の日本人コミュニティのめんどくささとか、日本人コミュニティ全体の中の濃淡とかは知らないのかなっていう気はしますけどね。

坂部：あまりべったりした感じでは、そういうのは。

上田：うん。ハルピン引き揚げ者でもそれこそ、『赤い月』のなかにし礼（注：1938年、牡丹江生まれ。小説家、作詞家）と、私がずっと聞き取りしていたご婦人達とではやっぱり違うし…。一緒にしないで言うんだよね、あの方達は、あの人らは後から来た人達だと、「満洲国期になってきた人たちだ」と（注：日本人のハルピンへの移住は、早くは日露戦争以降の1900年代後半から始まっている。ただし当時は長春以南の鉄道沿線は日本に割譲されたが、ハルピンは日本人の居住が認められているだけの外国領であったため、その時代からの移住者と満洲国期以降、日本の権益が成立して以降の移住者との差異がみられる）。だからちがうっていう風に言うし、ハルピンで小学校の先生、音楽の先生してた方の話もきいたんですよ。まだご存命かな。彼女は赴任した時が満洲国になって来た日本人ばかりの小学校で、子達はやっぱり何て言うのか、お行儀が良いというか、日本語しか喋れないっていうようなことを言ってたし、ハルピンは日本人の小学校が3つか4つあるから、小学校の同窓会の中でも、「あそこの小学校の子たちは」という語りをするから、自分たちのグループとあっちのグループはちがうという認識をしている。桃山小学校ってのが一番古い小学校なんですけれども、桃山小学校のOB会行くと、後から満洲国期のときにきた人たちに対して、自分らは違うっていうような語りをされますね。

原田：そうなんだ。

上田：あっちの子たちは日本語しか喋られないって、日本のことしか分かってないっていう言い方をする人もいます。

原田：こっちにいる小学生と元々いる小学生の区別は、ハルピン生まれって事ですかね？

上田：ハルピン生まれだし、最初にできた小学校なので、ロシア支配時代も張作霖張学良の時期も経て来た小学校なので、そこのご父兄っていうのは叩き上げでハルピンで裸一貫からやって来た人だから、親はいろんな言語を喋れるご家庭で育てているから、多文化ファミリーの中で生きているので、僕らんところはお手伝いも中国人だとか、父親が中国人つかって仕事をしたとか、ロシア語喋るとか。だからルー大柴のファミリーヒストリーのための考証の取材を1回受けたことがあって、その出来上がったビデオを拜見したら、ルー大柴の家も多言語でしたね、同じ桃山小学校ですね。

原田：ルー大柴ですか。まさにコスモポリタンの言葉ですね。

上田：そうそう。だから自分のしゃべりかたとか、コスモポリタンの表象はそこにルーツがあるんだなっていう風に、番組の中で語ってましたけどね。前田時計店っていう、キタイスカヤにある、時計屋さんのお孫さんらしいです。引き揚げてきてからはご両親の離婚で名字は違うらし

いです。

原田：満洲繋がりの方は多いですね。先ほども出てましたが小説家でも多いじゃないですか、たくさんいますよね。

上田：いますいます。

原田：『ファイチンさん』，上田としこの影響は？と聞くのはありきたりですし，さらに戦後日本社会に与えた影響は？と聞くのは愚問ですけど，ちょっと気になるところでもあります。

上田：これが戦後の日本に影響を与えたかって？どう思う？

坂部：笑

【戦後の漫画に与えた影響】

上田：上田としこって私の祖母と同年だから，私の母も漫画を読む人だから読んだことあるのかな。聞いてみなきゃ。母がダメでもおばはいるから，母とおばにファイチン見たことあったって聞いてみたいなと思ってます。

坂部：たしかに。そうなんや。漫画好きにとって『ファイチンさん』とか上田としこの影響っていうのは何かありますかというの，初めメールでいただいた質問の中であったじゃないですか？それを見てた時に四方田犬彦が書いた，漫画に対する評論なんだけれども，『日本の漫画への感謝』（四方田犬彦，潮出版社，2013年）という本で，上田としこを取り上げていて，『ファイチンさん』について書いているのと，それから私こっち読んでないんだけど，『ほんこちゃん』（上田としこの漫画，1955～61年，『りほん』に連載）っていう，これ引揚者の話のような作品を論じていて，日本の中でもう一回開拓，国内開拓に入っていく話が描かれている。この四方田の話で面白かったのは，上田としこをすごい評価してるんだけど，最後に漫画の後継者は高野文子（注：漫画家，イラストレーター。『絶対安全剃刀』『るきさん』など）じゃないかって書いている。

上田：書いてたこの本にも。

坂部：高野文子ってそういう風にて読めるかなって思いながら。日本の少女漫画の流れの中で，確かにドライな，なんていうか少女漫画主流のメロドラマとは違う乾いた文体と，描線が特徴的でそういうふう読めるのかなって思いながらこの評論を頼んだんですけど。両方とも大好きなんで。

上田：弥生美術館の学芸員が高野文子あげたのかな。どうでしょうね。なんかでも今見たらすごく絵のセンスいいなと思う。足が長くてとか、チャイナドレス系の服の着せ方とか。

坂部：着せ方とかね。着方とかね。チャイナ服、あれすごく着にくい物じゃないですか。それすごく上手に着てたりとか。

上田：そういうこの絵のセンスの良さ自体があって、お目目キラキラ系じゃない方の絵が好きなタイプの女の子にはきっと受けるよね。きっとこのデザイン性は、この後お目目キラキラ系に世界が変わってくじゃないですか、少女漫画世界は。

原田：確かに。

坂部：だからよくそういうのがサザエさんもそうだけれども、そんなキラキラ系じゃない…中原淳一とかそういう少女的なものを描いた人たちの文化の中に、なんかこう出てきて食い込もうとした女性作家の一人なんだろうと思うんだけど、そういうのとはちょっと一線を画した、女の子が女の子に別にドラマをロマンを与える必要はないのかもしれないって。

上田：ロマンを砕くしね。最後、坊ちゃんの許嫁ってということでてチャングイがおしてるんだけど、そんなのは古いわって潰していくから。玉の輿って話も読者にとっては受けるだろうに、媚びないんだって思って。

原田：そうですね。

上田：さらに、主人公の相手役の男の子が幼児なのでね、あまりにもね。

坂部：だから他の作家さんとか、村上もとかだけはどれだけ好きだったのかっていうのをすごく熱く語ってますけれども、他の人から、私もそんなに漫画家の証言をいっぱい読んだわけじゃないから知らないんだけど、この作品にすごい影響を受けたって、そんなに聞くわけじゃないのでパッと分らないんだけど、ただセンスはものすごいある。

上田：あると思う。

原田：絵をかなり勉強してますよね。

上田・坂部：うん。

上田：ちゃんと画塾行ってとか，絵の勉強はしてるみたいですね。いや，だから漫画家全体に影響を与えた，漫画家コミュニティの中で世話人的な動きはしていたってのはあるけれども，読者たちにとって，それこそさくらももことかの方向とかに繋がっていくのかもしれないけれども…

坂部：うん，確かに。

上田：さくらももことか亡くなっちゃったからもうわかんないけれども，ああいう系の絵を書くタイプの漫画家さんたちにとって，記憶に残ってるのかっていうのが気になりますね。

坂部：確かにちょっとコミカルなところもいれてね。でもそうだな，うちの母親とかはあんまり漫画読まない人なんで分かんないけれども，そういうのを読んでた世代に是非聞いてみたい。

原田：『フィチンさん』は連載してたんですよね？

坂部：漫画賞も取ってるんです（注：『フィチンさん』『ぼんこちゃん』他で，1959年，第5回小学館漫画賞受賞）。実際にそれなりに影響力があったはずなんで。

上田：竹宮恵子は読んでたんですかね？

坂部：どうなんかな。

上田：漫画ミュージアムに展示してあったっていうことは竹宮恵子いたでしょ？もう京都に。

坂部：あー！

上田：なんかかいてなかった？解説にとか。

坂部：知らん，それを意識して見てなかったのはあるけど。ああ。なんか覚えてないけど，そうか。そうか竹宮恵子はあそこで学長やってたぐらいの時代なのかもしれないな，精華（京都精華大学）で。確かに。

上田：うん。高野文子もだから影響を受けたっていう，高野文子の証言もとっているのかな。

坂部：うんうん。この人が勝手に後継者だと思っているっていうだけのもので，そういうのと関係があるのかどうかっていうのも分からないのだけれども。まあでもこういうのもありかってい

う漫画のひとつなんだろうなって思うけどな。

上田：高野文子ってたくさん読んでないから・・・。1, 2作しか読んでないからなあ。

坂部：私は結構読んでたからな。ほぼ出たもの全部読んでるんだけど、ちょっとテイストが違う。シンプルな線で何て言うのかな。映像として記憶に残るっていう的なものも多いし、内容もちょっと若干不条理も含めた何かを表したり文学的なものの作品ですけれどもね。

上田：あとこれすごい漫画のデザインの文化のどうこうかもしれないけれども、すごい最初の頃は連環画を思い出すんだよね。

坂部：ああ。

上田：コマ割りのこういうものとか。あ、連環画みたーいって。連環画もよんだことあるんだろうかって。

坂部：かも。

上田：後は馬賊関係とか、秧歌（ヤンガ）踊り（注：中国北方の民間舞踊の一つ）のこととかは、結局これはどこで仕入れた知識なのかなって、見てるはずはないだろうなって。ハルピンで秧歌踊りをみることってあるんだろうか。田舎いかないとやらないだろうって思うんだけど。

坂部：一応田舎にも行ったりしてるでしょ？おばあちゃんちとか。全く行ってなくはないのかな。どうなんだろう。

上田：どうなんだろう。でもグラビア誌、『満洲グラフ』とかに出てるはずだからそういうのでみてるのかな。どうなんかな。だからどっか自分の実体験では明らかにないから、自分が生きてたハルピンで仕入れた情報を上手いこと組み上げて作り上げているってのはある。自分が生きてた、見てた以外のハルピン情報を何で仕入れたのかなってというのが気になる。

坂部：でもその割にはすごいおしゃれな、文化的なハルピン像が薄くない？ベタベタな中国的なのが結構強くて。

上田：それはそう。ロシア臭さが少ない。

坂部：スケートとかそういうのははいつてるけれども，バレエ見に行ったりとかさ，その当時の文化の体系の中にいる人だったらそういうカルチャーの方がすごく強いんじゃないかって思うんだけど，中国の庶民を主人公に持ってくるっていうのがあるのかもしれないけれども，すごい日常の中国風景だよな。

上田：うんうんうんうん，そう。だからこそ連環画が絡んでるのかなって思って，連環画じゃなくても，満洲で出ていた，中国語の雑誌で『麒麟』っていうのがあるんだけど，それに四コマ漫画とか一コマ漫画とかが入っている。中国人向けの、『良友』でもいいと思うんだけど，中国人向け中国語雑誌の中の漫画とかの影響って出てないのかなって。

坂部：どうやろうね。

上田：見てるんだろうか見てないんだろうか。だから漫画に表現した時のチャイナドレスはどんなのかとか。

坂部：すごいリズムカルな動きとかはどっからくる，まあ本の資質なのかどうか。

上田：あとこの人の師匠が描いたカットとかが『ファイチン再見！』に所々入ってる，そこに出てくるカットの中にも，こう中国人像っていうか，戦前の漫画の中に現れる中国人の描かれ方っていうのはどうなってたんだろうっていうのも，意識してなかったけど，気になりました。

坂部：どうやろうね。

上田：ねえ。

坂部：なんかあるのかな。のらくろとかそういうので出てくるのかな。

上田：そう。『のらくろ』は軍服の方が多いからあれだけでも。

坂部：中国人像か。どっかで表現されてるってのがあるのかな。パッと思いつかないな。ちょっと文脈違うんだけど，読み返してて面白かったのは，日本人の女の子を道端で助けて家まで送ってあげるっていうところがあるじゃないですか。あそこで急に喋り方が日本人にととの（たどたどしい）中国語の喋り方になるっていうのが面白い。

上田：ゼンジー北京の中国語風日本語に。

坂部：なんでここでこういう風になるのって、ちょっと面白かった。

上田：中国人留学生にゼンジー北京の YouTube を見せたら、中国人が日本語習いたてで変な日本語しゃべってもこうはならないってうけるんですよ。なのに、ゼンジー北京風の日本語で表現するんだなあと思って。

坂部：本来『フィチンさん』は、中国人の女の子が日本語で何か表現してるっていう矛盾があるわけだから、それを何らかの形で表現したいのかもしれないけれども、日本人の女の子にはこんなふう聞こえたっていう風にしたいんだろうけれども、なんかちょっとあそこの作りが面白くて。

上田：日本語が下手な中国人の日本語はああではないと思うけれどもと思いつつながら。

坂部：そうだから今日ここで話させてもらうのは結局日本人ばかりにしちゃったじゃないですか。

原田：確かに。

坂部：劉コウ君呼んで来れば良かったと思って。満洲のことやってるんだし、彼に読ませてこれをどう思うかって聞けば良かったなって。

上田：これ本当に連環画っぽいから、中国語訳して売ったら連環画？中国人が書いた？っていう具合に普通に流通するんじゃないかなろうかって思ったところはある。

原田：なるほどね。

上田：名前隠して連環画の体裁にしてぎゅーっと流した時に、作者が日本人だと気づくだろうか。意外と気づかないんじゃないかって。

原田：気づかないかもしれない。

坂部：『フィチンさん』ってアニメ化されたの？

上田：らしいね。

坂部：上海の映画祭で受賞したって書いてある。

上田：うん。あのどれかな。最終巻かな。『フィチン再見！』の最終巻とかに出てたよ。村上もとかが涙流して見てるカットが。

坂部：そっかー。なんかあった気がするな。でも覚えてないな。

上田：その頃気づいてなかったなって。2002年ぐらいだったかな。ってことはどこかで手に入るかな。マイナーだけれど探せば見れるよね。

坂部：ね。いやだから読んでもらったらどう思うんだろうなとか、是非感想が聞きたい部分。

上田：女の子や男の子や年齢いった人や。そうだよ。いや満洲経験してる高齢の方。それこそさっき言ってた谷（学謙）先生みたいな。当時の満洲を知っているような、日本語読めるような人が読んだらどうなのかって気になるよね。年配で元気な人あんまりしらないからな。

原田：朝鮮の話とか台湾の話とか描いてないっていうのは、日本で、中国人の少女を主人公とした漫画、ほかに何かありますか？

上田：そういえばゼミ生と話しててでてきたんですが、40年くらい前の少女漫画で中国人風の女の子が主人公のものがありました。

原田：それは絶対知らない。中国が舞台になってるの？日本人が？

上田：日本にいる、中国人の子みたいなでしたね。

原田：1980年代とか？

上田：検索してみますね。『ミンミン！』でした。あさぎり夕っていう漫画家さんが書いた（注：あさぎり夕が『なかよし』に連載した作品。落ちこぼれ魔法使い少女の話で、コスチュームが中国的な衣装であった。単行本は1990年から発刊）。

坂部：あさぎり夕って聞いたことあるぞ。割と古参の少女漫画家だよな？

上田：（スマホであさぎり夕の漫画みせながら）こんなの。

坂部：おお！ああ！なんか見たことがある感じの。

原田：すみません。知らないな。

坂部：中国に題材をとった漫画ってのはあるけどね。

原田：ただ、主人公は日本人が多かったりしません？だけど、『フィチンさん』では、日本人が出てこないっていうか。

上田：そうですね、『フィチンさん』は日本人が出てこないというのは画期的ですよ。

原田：本当に。

上田：主要キャラクターの中に一人もいないもんね。

原田：いないですね。そういう漫画はあまりないと思いますよ。だから共感できないですね。普通は。

坂部：完全に中国のことをかいた漫画ってのはありますよね？なんかあったよね？少女漫画で。

上田：このぐらいの時代に？

坂部：いやそんな古いものではない。もっと最近。

上田：普通に中国を舞台してるような？

坂部：そうそう。お芝居とかさ（たとえば皇なつきの『燕京俗人抄』、角川書店、1996年、など。京劇を題材とした物語で、映画『霸王別姫』の影響を受けて描いたという）。

上田：それはまあまああるよ。

坂部：ある。だから中国好きな人達。

上田：大学でおそらく中国史、中国文学やっただろうっていう人たちが描いたようなね。

漫画『フィチンさん』をとおしてみるハルピンの情景，満洲国，戦後日中関係

坂部：そうそう。すごい絵が綺麗な人たちもいるし。なくはないと思うんですけども。こういう複雑な場面を書いているんじゃないかって、完全に中国の中の話。

上田：今の普通のストーリー漫画で、中国の時代劇をかいてるような人たちはまあまあいっぱい。同時代で、それこそ『キングダム』（注：原泰久による、中国の春秋戦国時代を舞台とした作品。2006年から『週刊ヤングジャンプ』に連載）だってそうですし。

原田：『キングダム』は読んでますけどね。ただ、リアリティがあるようでないような。

上田：そうですね。

坂部：まあでも古代までたどればね。

上田：古代史系はね。『三国志』は日本人は…、刷り込まれてるから。江戸時代からの刷り込み、日本人という集団にとっての娯楽小説における幼児体験のようなもので日本人のサブカルに刷り込んであると思います。日本では『三国志』は永遠にファン層が途切れない。水滸伝は刷り込めてないけど。

坂部：なんでだろう。熱さのギャップがあるよね。

上田：でも私は『ONE PIECE』（注：尾田栄一郎による少年漫画。1997年から『週刊少年ジャンプ』に連載。既刊で101巻になる）は水滸伝っていう持論をもってて。

坂部：ほう。なるほど。

上田：謎な役に立つのかどうかよくわからない能力持ってるとか、主人公より脇役の方がキャラが立ってるとか、反政府集団であるとか、キャラクター異様に多いとかっていう意味で。『ONE PIECE』『水滸伝』ってなにか通じるものがあるっていう。

坂部：そういう物語の語りのパターンっていうものとして日本文化の中にあるんでしょうね。

上田：刷り込まれてるんだと思うんですよ。だって大岡越前だけ？あれも江戸時代に入ってる文学作品がベースになってるので。

坂部：ふーん。なるほど。

上田：あ、『三侠五義』（注：清代に作られた通俗小説。北宋時代の裁判官である包拯についての物語か、『包青天』（パオチンティエン）（注：中国で著名な包拯を主人公にした勸善懲惡のテレビドラマ）ですよ。

【ノスタルジーと排斥】

齋藤：いくつか疑問が。私が買ったのは、たまたま三巻本のフィチンさんなんですよ。石子さんとの対談ってのが載っていて、何が書いてあるのかって言ったら、最後、上田としこと石子さんが長時間話をして、最後に石子さんが上田としこに、「満洲に行きませんか」って誘うんですよ。ところが上田としこは「もう行きたくない」って答えたって書いてあるんです。これだけ描いておいて、なぜ行きたくないんだろうなっていう疑問が湧いて。これが一つ目の疑問。

二つ目は5年間も連載されていて、始まったのが1957年。57年っていうとちょうど日本が戦後じゃないっていう風に『経済白書』にも書かれたりして、日本の戦争、日本人の戦争体験を日本人自身が総括してみようかって時期にちょうど5年間連載されてる漫画で異例のヒットっていうのは、なかなかないことだと思うんで、当時そういった時代の中で、日本人がかつての戦争なり、満洲引き揚げ、支配っていうのを、どうこの漫画を通じて振り返ったのかってことに興味があります。

悪いことしたなと思うのか、単純にノスタルジーを感じるのか、何も感じないのか、戦争が終わって良かったなっていうくらいなのか。そこに必ず上田としこからすればコミットさせようとして描こうとしてたんじゃないかって。日本人の歴史認識、何か思うところがあって書いてたんじゃないのかなって。ただそれがどう届いたのか分からない。中国から引き揚げてきた漫画家たちもすごく戦争や満洲支配を批判的に描いたり書いてるんで。ただそういったものが1956年、57年の頃、読者にどこまで届くのかっていうか。なぜそのように赤塚不二夫もそうですけれども、生活や子どもを書くという手法を通じて、何を読者に訴えたかったのかなって。何を振り返って欲しかったんだろうなっていうのがちょっと疑問に思いますね。どういった意図、意図とまではいかないけれども、もうほとんどみんな、「中国引き揚げ漫画家の会」の人たちもほとんど亡くなってるので分からないんですけども。

子どもの生活を描くっていうのは僕にはすごく新鮮で、なんていうんだろう。満洲ってやっぱり大人の国っていうか。上海も大人の国っていうか。なんか怪しいっていうか、満洲の支配がある中で子どもは本当に純粹っていうか、純粹って変ですけども、見たものそのまま、もちろん戦後なので思い出して描いてるんですけども、なぜ子どもを題材にしたのかなって興味がありますね。

あとやっぱりフィチンさんもそうですけれども、上田としこがハルピンを書いた絵。例えば肖像画とかソフィア正教会とかでてくるところも、例えば、百貨店のチューリン（秋林）の絵も、別の本で書いたりしてるんですよ。鉄道の線路の描き方とか、見たものをそのまま描いたのか、それとも戦後、もしかしていろいろ絵の勉強したっていう話でしたし、僕の印象だとハルピンには確かに描かれているような建物があったなって受け止めたんですけども、本当に勉強になりますね。普段考えないこときけてすごく楽しいです。

上田：結局齋藤さんってハルピンに何年いらっしやったの？なんかメールに書いてありましたね。いつからいつハルピンって書いてましたっけ？

齋藤：1997年から99年ですね。

坂部：2年間？

齋藤：はい。2年間です。

上田：いたね？私たち。

坂部：私ね，多分行ったかどうかぐらいかな，私。

上田：私，99年の9月から行ってるから，2回目のハルピン。99年の10月は私は黒竜江大学に1カ月ころがりこんでいて，哈爾濱市档案馆で調べ物してたんですけども，歩平さん（注：黒竜江社会科学院から後に中国社会科学院所長となる。中日関係史の専門家）もそのころいたし，その前の年に下見に行ってる時に会ってるんだと思うんですよ。

齋藤：なるほど，失礼しました。本当にお恥ずかしい限りです。

上田：いや全然。絡むような研究は世に出してないから。こっそり隠れたところでしかやってないから，教育関係の研究は。

齋藤：いやいや。

坂部：でも街の雰囲気はどこまで，どこまでハルピンで住んでた人にとって，リアルなんだろうなっていうのが。例えば今ガイドブックでかかれるようなキタイスカヤ通り（中央大街）とかがさそのまま出てくるわけじゃないし，傅家甸でのお店とかも，お店かの話は出てくるけれども，映像としてそんな出てくるわけじゃないから。本当にお屋敷の中とかさ，そういうのばかり。

上田：多分，上田としこはそんなには傅家甸には行ってないんだと思うんだよね。いいところのお嬢さんだったから，傅家甸にはいくなっていう風に言われてるはずの階層の家の人だから。

坂部：本人はそんなにそこに入っていない，イメージのハルピンってところがあるから，それはどうなのかなっていう風に。

上田：だから当然あれですよ。ソフィア大聖堂（注：聖ソフィア大聖堂。ハルビンにあるロシア正教会の聖堂）はあれは聖堂としては当時ロシア人にとって大きいものではないから、ソフィアは出てこないんですよ。サポールのシルエットみたいなものはあるけれども。

齋藤：そうですね。

上田：ソフィアは戦後に残ってて、西澤泰彦先生（注：名古屋大学教授、植民地建築の研究で第一人者）曰く倉庫の奥に残っていて、隠されてた周りをとっばらったら出てきた！みたいな経緯で人目につくようになったおかげで、文革で壊れずに済んだから、文化財として、観光資源になっているけれども、上田としこの時代には著名ではなかったのかも。フィチンさんのなかではやっぱりサポールの方が出てくるよね。ソフィアは全然出ていない。むしろ。あとは原田先生はカトリックだと思っていましたけども、あのミッションスクールはカトリック系なのかどこ系なのか微妙だと思います。それこそ生田美智子さん（注：大阪大学名誉教授。満洲へのロシア人移民についての研究で有名）とかロシア人研究をしている方に読んでもらったらいろいろわかるんだろうけど。

コマのところで行くつか気になるものはあるけれど、割とスルーしているから、みていくともっといろいろ注目すべきことは見つかるかもしれません。

齋藤：チャイナドレスの描き方とか、着こなし方とか考えたことなく、全然日常的に考えないですね。洋服の描き方とか考えないなあ。

坂部：チャイナドレスとかチャイナ服って、着るのなんか手つりませんか？

上田：きちんとしたやつね。チャイナドレスは、ジェンダー研究方面でそれなりに厚いんですよ。謝黎さんとか。また、女性表象とか漫画に出てくるチャイナ服を着た女性を表象するかとか、それこそ上海研究方面でいっぱい。坂元ひろ子（注：中国思想文化史の研究者。一橋大学名誉教授）さんとかね。

坂部：大人とか男の人もそういうの着てるから、ああいうのを日常的にパッと羽織って着るっていうシーンを見たことがないので、あまり。

上田：お父さんが着ろっていうシーンとか。モンゴル服とか、ここ最後のところモンゴル服着せるじゃないですか。頭はターバンにしか見えないけど、布を巻いて・・・。あんまりモンゴルらしくは見えないとは思いつつ、モンゴル人を入れようとしてる。

坂部：さっき話してた石子順との話で対談のところで、満洲に行きませんかって言われて行きたくないって言ったっていうのあったじゃないですか。あれ確かに一定の満洲の引揚げの人たちは行きませんかとか、ある種のノスタルジーでもう一回訪ねて行く、故郷訪問とか再訪する人もいるけれども、もう二度と行かない、行けない、行きたくないっていう人もやっぱり一定数いるんですよ。やっぱそれはどういう思いがあるのかっていうのはちょっとそれぞれに聞いてみないと分からない所はあるんですけども、自分が生まれ育った故郷に対する直接的な思い出とか、懐かしさとかそういうのは多分あるんだけど、それがどういう状況のもとに成立しているのかっていうのが、後で確認された時に、敗戦っていうのはそれを突きつけられるわけですから、それがあった時にそのこと自体をもう二度とそこの現場に、訪問できないと思う人もいるみたいだし、上田としこなんか肉親が現地で亡くなったり、何らかの状況があったりして、自分のある種の想像力のソースとしてはすごく大事な世界なんだろうけども、じゃあ実際にもう一度自分が行くかって言ったらそれが嫌だって思う人もいるのかもしれないなーっていうのは、いくつかのパターンが考えられるかなって。あと歳を取ってきたらもう一回行ってもいいと思う人もいる。

上田：あるある。はいはい。

坂部：この間、去年読んで書評したんですけども、こうした人たちの満洲の記憶について、満洲からの引揚げの団体が出してる会報をものすごく丁寧に集めて、それをその団体ごとにどういう表象を表してるのかっていうのを、佐藤量くんや菅野智博くんとかが編集して書いた本（注：佐藤量，菅野智博，湯川真樹江編『戦後日本の満洲記憶』，東方書店，2020年）があって、満洲引揚げ者の会報を正面切って分析してるっていうのが、特徴です。わたしは修論の時、97年くらいにそれを少しやってるんですけども、その時も、引揚げ者の会報っていうのはノスタルジアを垂れ流してるところがあって、そういうのを取り上げることによって植民地侵略を肯定してるっていうことにならないかって、ちょっと心配されたりとか危惧されたりとかしたんですね。けれども、彼らはものすごく丁寧にいろんな分野の人を集めてやってるっていうのもあって、こういう素材を分析することができるんだっていう感じがしました。でもそこに入ってくる満洲、何て言うのかな、故郷の表象っていうのはすごくナイーブなやつは、日本人は満洲建設にこんなに貢献したのっていう部分もやっぱりどこかで浮き沈みがありながら現れたりとか、いろんな形で上昇してきたり、消えてったりするんですね。あの本がすごく面白かったのは、日本の引揚げ者に対する補償が出るか出ないかっていうこととそういう語りが結構連動してるところがあって、満洲国軍って外国籍の軍隊なんだよね。だから日本軍の恩給をもらってる人たちと全然扱いが違ってしまふ。満洲にいた時に関東軍に入るか、満洲国軍に入るかは単なる違いでしかなくて、満洲国軍にも日本人が必要だからってそっちに行った人もいるんだけど、帰ってきて引揚げてきてみたら、日本の軍隊に入った人は後で恩給が出るんですよ。けれども満洲国軍は外国の軍だから自分で勝手にいったのだからって言って完全にそこは切られていて、自分たちがどのようにそこ

に貢献したのかっていうところをいうために、どれだけ満洲は傀儡国家だったのかってのを強調するとかね、日本の言いなりの国家だったんだっていうのを強調するしかないんだよね。それで最終的に補償を受けられないってなると、自分たちは現地の人たちとどのように協力してきたんだとかっていうことをすごく一生懸命強調する。そういうのの違いがすごく丁寧に分析されているテキストで面白かったんだけど、その関係性っていうのも戦後日本社会での受け入れられ方みたいなことと、それから故郷とかそういうところに対する思い入れ、感情、ノスタルジアとかとの兼ね合いがやっぱりこうストレートには語れないっていう状況がある。上田としこにもそういうあるんだろうなっていう感じはする。イメージーションのベースではあると思うんだよね。

上田：ここに日本が出てこないのは実はさっき齋藤先生がもう一つ言っていた、57年からの5年間の戦争の総括をする時期にかかっていることと関わるのかもしれませんが。上田としこのその意識がどう出るかっていう点ですけど、要は日本人は端役でしか出さないし、貧しい日本人しか出さないっていうのは、日本人はあくまでも客分でしかないっていう描きかたなんです。本当に所々に日本のお正月っていう、振袖を着たカットとか出てくるけれども、でも、日本人のお金持ち、日本人のエリートは一切書かない。日本人の学校も描かないっていうことは、これは彼女の決意だと思うんですよ。もっと日本人いたはずだし、この階層だったら、中国人が表現したら、嫌な日本人を描いたりとかするはずだけれども、それが出ない。さっき言ったようなアメリカに療養に行くような男の子がいるけど、療養に日本には行かせない。という意味で、本当に日本を排除して描き切ってるっていう。要は満洲国があるべき姿はこうだったはずだと、日本人もロシア人もいるけれども、主は中国人で、あるべきハルピンなんだっていう、戦後、上田としこの理解の結果としてこれをかいてるのかなっていう気がする。

坂部・原田：ほうー。なるほど。

上田：だからここまで日本人排除してるのかなって。

坂部：だって日本人社会さっき言ったけど…

原田：日本人を排除したっていう意図は分かりましたけど、何で日本で売れたのかっていう、日本を排除したものが。

上田：それに賛同する日本人がやっぱりいたんでしょうね。『フィチン再見!』の方の最後のあたりで(8巻～9巻)、編集者が上田としこに対してフィチンさんを書けなくなるかもしれないといってくるのにたいして、『フィチンさん』のなになが問題なの、というようなやり取りのどこ

ろもある。だから、当時の編集者がどう思っていたのかっていうのも気になるところです。編集者って知識人だから、それでも日本でうけるということは、読者の日本人の中にも上田としこの覚悟に共鳴するものがあるのかなぁ。私がお付き合いさせてもらっていたハルピン子の方々も、一緒に中国に行ったときに「ここは中国なんだから」ってやっぱり言うんですよ。ここは中国の土地なんだから、日本はでかい態度をしたけれども、ここやっぱり中国なんだよねって。そこは多文化都市としてのハルピンではなくて、ここは中国なんですと確認している。中国に再びやってきて、嫌がらずに案内してもらえたり、ガイドしてもらえたりして嬉しいわって。やっぱ中国ですよって。ここで生活させてもらってたんですって。ここで生まれ育ってハルピン子なんですって。けどやっぱりここはあくまで中国ですからって、繰り返してらした。『フィチンさん!』にもそれが出ていると思います。あ!だからこれを引揚げてこられた桃山小学校の人たちに読んでもらうといいのかな。OBの、同窓会の方達に。

原田：読んでいた可能性は高そうですね。

上田：読んでたと思います。それをどう思われますかってのは聞いてみたい。

坂部：それは聞いてみたい。

上田：2世、3世とかも…。いった人達はもう亡くなってから、その子どもさん達とか、引き揚げてきて生まれてる人たちとかはやっぱりいるだろうから。どう思われますかってね。

齋藤：確かにそうだなって思いましたね。ちょうど私の親父が1943年生まれだから、まだ子どもだったり中学生だったり、もうちょっと上かな。上田としこの決意っていうのをしっかり受け止められた人はどれだけいたのかなっていう。さっき言われたみたいに中国っていうのはなんか、すごいシルクロード文化じゃないですけども、幻想的なすごい友好的なそういう盛り上がりになって行くところの前段階で、上田としこはおそらくそんな簡単な話じゃないってことを伝えたかったのかなって感じたんですけどもね。それを当時、戦争をどう見たのかなっていうのはさっきの桃山小学校の話し、お友達、息子さん、娘さん達がどう読むのかっていうのは興味があるところですね。50年代、60年代ならどう思うか、今ならどう読めるのかっていうのは、日本史の戦争認識っていうか、アジアをどうみるか。そういった視野を考える上ではとても大切な漫画っていうか、先生方の話しをうかがっていて思いましたね。

上田：日本はいつから中国を見下すようになったんでしょうかね？

原田：GDPで抜かれた頃じゃないかな？

上田：戦前の中国を見下す流れではなくて、それもあるんだろうけれど、むしろ戦後の流れかな。今のアンチ中国もそうなんだけれども、アンチ中国が強調される前に一回やっぱり遅れた中国像を日本は刷り込むわけですよ。国交回復をして実際に行ってみたら、遅れてたみたいな感じの中国像がどっかで、現在の日本人の中国像のベースになる。他方、国交回復の前の段階は文革礼賛派がいる中でユートピア中国像ってのがあった。

原田：あった！

上田：うん。ユートピア中国像の前段階の中国像ってどんなもんだったんでしょうね？

原田：そこなんですよね。

上田：どうなんですか？そのとき青春じゃないですか？

原田：違う違う。

上田：何年生まれですか？

原田：1963年。

上田：じゃあ、ちょっとしか違わないか。

全員：笑

坂部：言うほど違わない。

原田：個人的な話だけれど、1972年の国交回復の後に、中学校の先生が中国に行ってるんですよ。帰国後、2時間ぐらい社会の時間を潰して、中国の素晴らしさを語ってた。その素晴らしさというのが、自己批判の話なんだよ。大衆の前で、自己批判する話を熱く語ってました。それが一番初めの中国との接点かな。ただ、家に帰ると、父親が名古屋市交通局だったんだけど、ちょうど文革の流れの中で日本社会も自己批判というか、凄い吊し上げをやっていたんですよ。父親は吊し上げに上げられた方で、徹底的にやられていたらしいんです。どこかの屋上に呼び出されて自己批判しろみたいな。ちょうどその頃、母親は生活協同組合をやり始めてたんですよ。そしたら夫婦喧嘩になって。父親は、母親の活動を辞めさせようとしてね。そういう意味でいうと、1972年以降の話ししか良く分からないです。72年以前の中国をどう見てたのかって

いうのは分からないんですよ。ただ今日の話を聞いていると、1950年代、60年代の感覚を分かるためのヒントがあるかなと思います。その辺をもう少し整理していく必要があるのかなって思います。

【日本人の中国観】

坂部：憧れと中国を低くみるっていうのは裏表のようにどっちかだけっていうのじゃなくって、結構ずっとあった気がして。特に近代化以降の日本社会の中にはずっとあったように思います。ある種中国大陸に憧れとかロマンを求める人と、それから遅れた社会である、確実に近代化から遅れた社会であるっていう風に脱亜論が始まるように、夏目漱石だってクーリーのことを結構冷たく書いてたりとかするっていうのは、よく証言とかで言われているけれども、そういう相反する思っているのは、常にあるってどっちがメインで出てくるのかとか、力が強くなるのかっていう流れは、それぞれであるのかもしれないのかなっていうふうに思うんだけど。

原田：そうですね。ところで、皆さんが中国に行かれたのは、1990年代ですか？

上田：91年かな。

坂部：私は90年か91年。

原田：天安門はもう終わってからですよ。

上田・坂部：そうですそうです。

原田：私は1987年ですけど、天安門事件後に留学していました。当時は、そんなに留学生はいなかったけど、アフリカ人がたくさんいて、それからヨーロッパ系、日本人は10人程度でした。

上田：中国の大学に？

原田：そう。その時に日本人だけでなく留学生と食事する時に、よく議論していたのは、この国が好きかどうかという。

上田：それは絶対やるやつですね。

原田：やりますね。はっきり嫌いだって言ってる留学生が多かったですね。

上田：まあね。

原田：留学先が上海だったからかもしれないけれども、会社関係で来てる人が多かったんですけど、そういう人は目的が違うからか、嫌っていた人は多かったですね。

上田：会社関係で来てた人は嫌ってましたね。なんで中国に来る羽目になったんやろう、って。中国研究やりたくて中国来てる身としては、やっと来れた！！っていう感じで中国来ているので、ギャップを感じました。

原田：私もそっち側ですけど、会社からの派遣で来てた人間は本当にきらってるなって、見下し感っていうのがありましたね。

上田：汚いとかズルするとかそういうことはよくいってましたけれどもね。

原田：そういう話しはよく聞きましたね。

上田：そうか、要は90年代の遅れた中国、国交正常後に日本が持った遅れた中国観はその層、ビジネスマン層が作ったのか。

原田：そこは大きいと思います。約束守らないとか、ホント単純なことで怒ってましたよ。もちろん、私も怒ったことがありますけれどもね。でも、だんだん自分が約束守らなくてもいいんだって思うようになりましたけどね。ただ、会社からの派遣の人は、すごい金を持ってて、よくおごってもらってたからあんまり露骨に喧嘩しなかったけれども、腹の中ではいつも早く帰ればいいのって思っていましたよ。あと、90年代入って天安門事件が鎮静化したころから日本からの旅行者が増えましたよね。結構年配の人たちが多かったと思います。そういう人たちが、中国人に怒ってるのよく見たな。ホテルとか電車の中とか。観光地でね。

上田：うんうん。でもそれはあんま会わなかったかもしれない。

坂部：日本人の観光客が行くようなところに近づかなかったようにしてたっていうのもある。

上田：うん。だから日本人の観光客っていっても、引揚げグループの故郷訪問に付き合ったりしただけだから。

原田：上海で留学していると、日本人との遭遇率は高くてね。

上田：バブル期の日本人から見た遅れた中国像ですね。

原田：そうです。それはありますね。ビジネスのルールが守れない中国人に怒るんですよね。そういうのはすごくあったなーって思いますけどもね。

上田：だから50年代の中国像ってリアル中国に接することができないんですよね。日本人は台湾とは付き合いがあるんだけど、リアル台湾とは接しているけど、リアル大陸は知らない状況だった。リアル台湾は植民地台湾を引きずってるから凄い上手な日本語で相手してくれるんですよ。台湾人は、50年代だと日本人相手に。

原田：今もそういうところありますよね。

上田：今もそういうところありますけれども、もっとあったし。だから台湾と仕事してる人は大陸とは違って台湾は台湾だっていう自覚がすごいあったんだと思いますね。だからやっぱりあくまで、中国像っていうノスタルジーで組上がってるのかな。50年代の中国像、ごめんなさいっていう気持ちも込めて。戦前も特に上海なんかそうですけれども、30年代から経済的には上昇してきて、日本を圧倒するぐらいでした。日本が戦争で制圧して押さえ込んだけれども、日本がいなくなった後、国民党の支配の中ですごいインフレを起こして、国民党が信用失うけれども、戦後間もない頃の上海もやはりすごい。共産党に落とされるまでの上海って、もう1回花咲くようなところがあります。だからそこで経験した人もそうだし、戦前の上海を経験してる人もそうだし、戦前に中国経験をしてる人は、30～40年代中国経済に日本が抜かれる可能性がありそうだったっていう体感を持つてる。なので中国を侮ったらやばいっていうことが、中国と経済取引をしていた人や政治をしてる人たちはわかってる。それを軍隊で抑え込んで、しかし戦争で負けて引揚げてきたっていうプロセスを経てるから、屈服させたはずだけれども、やっぱり無理でした、っていう経験を踏まえているので、やっぱり侮ることはできなかったんじゃないかな。50年代で引揚げてきた、夢敗れた日本人達はやっぱり中国を侮ったツケがこうやって返ってきた、やっぱり中国って凄かったっていう自覚はあったと思うんですよ。で、その凄かったっていう思いを払拭できない中、どんどん広げていって、文革でユートピアができたらしいという妄想に入れ込む人もいれば、文革は間違ってるっていうグループもいた。そういう風に分かれて行ったりするんだけど、72年国交回復して、蓋を開けていって見たらユートピア中国像に入れ込んだ人はホテルで部屋に鍵がかかってなくても物がなくなるんだよってすごいいい国だよって言って帰ってくる。でもしばらくすると中国も天安門事件直前になったら、すごい拜金主義になる、物はなくなる、何でも金次第世界になってくるっていう中で、やっぱりずるい中国っていうイメージがビジネスの中で出来上がってきて、50年代思っていた中国侮り難しってイメージがやっぱり忘れられていくんだろうなと思いますね。その時期に日本は経済投資をするので、上

から目線になってしまう。さっき坂部さんがヨーロッパのドイツ人の場合は追放だって言ったけれども、日本の場合は再度付き合い始めた時は、中国は経済的に技術的に少し遅れた、立ち遅れた時期だったから追放した側の日本人に対して、帰ってくることを受け入れたわけですよね。ODA 持って帰ってきてくれるっていう再スタートだった。追放されたはずなのに、日本は中国から追放だったことを忘れてるんですよね。

原田：国外退去ですからね。

坂部：中国が決めたというよりか、アメリカとかそういうのの合議で決められてるっていうところがある。日本政府は国民を中国、植民地にそのまま置き去りにするつもりだったんだよね。

上田：そうそう。

原田：そうでしょうね。置き去りにしたんじゃないですか？

坂部：だから引揚げ、戦後何回も船を出して引揚げをさせるつもりがなかった。そっちで何とか自分で頑張りなさいみたいなおつもりだったんだけど、蘭信三先生や川喜田敦子さんたちの研究によると、アメリカが結構元の国に戻すっていうのを主張したという（注：前出の『引揚・追放・残留』による）。国民国家っていう枠組みで。

上田：ヨーロッパ戦線の結果を踏まえて、国に連れ戻すっていうことをやってたからってことだよな。

坂部：そうそう。だからアジアの方も、ドイツは前例にならった形で引き揚げさせるって事を主張したっていうことをいってその研究に出てるって話なんですけれども。

上田：追放させたのは大陸じゃないから、確かにね。大陸側としては追放ではないともいえるかも。子どものない中国人家族で、日本人の子どもを引き取ることを積極的に受け入れようとしてる人たちがいるっていういい方もあるし。

原田：最近でもテレビで『大地の子』（注：山崎豊子の小説、それを原作としたテレビドラマ。中国残留孤児の陸一心の生涯を描いたドラマ。1991年に単行本刊行、日中の共同制作としてドラマ化され、1995年に放送）やりましたよね？

上田：ほんとですか？

坂部：やっていますか？

上田：私テレビがない生活してるので。

坂部：私もテレビのない生活してるんで，知らないんですけども。

原田：久しぶりに見てしまいました。懐かしいなーって。

上田：10年ぐらい前の学生までは『大地の子』見たっていう人はいたけれどももういないからね。

原田：そうですね。でも，相変わらず涙が止まらなくてね。これも一つの中国像ですね。

上田：いやー中国像，日本人の中国像はここちゃんと検討した方がいいね。50年代の中国像。

坂部：うん。まあどうかなー。共産党に対するアレルギーっていうのも多分一定程度あるし。

上田：そうそうそう。

坂部：引揚者に対する反発とかも，あいつら赤になって帰ってきたとか，そういう…

原田：でも，50年代60年代って日本では組合活動がかなり勢いがある時ですよ。

坂部：うん。運動やってる人もそうでない人っていう。

原田：そうだよ。そうでない人結構いるからね。

坂部：あれはあったのかもしれないですけども。

上田：でも運動に関して，今ほど嫌がられていない時代じゃないですか。運動するのも一つのありようっていうような感じで。

坂部：サークル活動とか。

上田：サークル活動で中核やってたら大変だけどね。

坂部：なんか、だから何て言うのか労働者としての活動の中に、例えばお芝居やってるとか何かかかいてるっていうか、芸術性みたいなの中で闘争みたいなのを表現するとかそういう活動。サークル文化っていう形でやってるっていう。

上田：組合の中で同人誌でてたりするものね。

坂部：だからそういうので一番開かれてた時代では確かにあったかもしれないですけどもね。ま、日本社会論として言えばね。

上田：その同人誌の中に、結構満洲経験をかかいてる人がいる。それに対して、戦前の日本人の満洲経験はやっぱり殿様旅行みたいな、満洲経験ばかり目立つからね。

坂部：視察みたいので行く人が多いんじゃないですかね。

上田：やっぱり中国はだめだよめみたいなのを落とすところになっているものが目だつ。ダメだよめ、だめすぎて面白いみたいなかき方をしちゃう部分が多い。リスペクト感がないよね。

坂部：満洲国って日本人を主導民族にして態勢つくるみたいな、開拓村とかいって日本人の農民がどれだけ頑張ってるのかっていうことは記録していくんだけど、遅れた中国との対比の中にそういうことが表現されていくってところはあるのかもしれない。

上田：朝日新聞って戦前一番早く満洲に支局おくんですよ。だから朝日の新聞記者が張作霖にあったっていう記事がすごい。張作霖をリスペクトしてて、やっぱりこのひとは大物だっていうのを書いてたりとか。

坂部：へー。

上田：新聞記者はそういうことを書くんですけど、旅行に行く人は何かね。満洲って駄目だよめっていうことをいうのが多いですね。旅行に行ける段階になるとそうだし、旅行に行く前は一攫千金で行く人達になるから、同時代のじゃなくて回想録でしか書いてないから、成功体験として大きい話になるし。

原田：なるほどね。『フィチンさん』を読んでちょっと違和感っていうか、違和感っていうとおかしいけれども、日本人の描き方がちょっと違うなって思ったのは、50年代の日本人の中国像っていうのがちょっとまだはっきりしてないっていうのか、知らなかったってことだね。

上田：今の我々からみたら想定できてないってということなんでしょうね。

原田：そうですね。

上田：だから文脈をね。私とか坂部さんは素直に当時を知ってる人が書いた読み物として面白い。ハルピンってそうだっていう流れで読んでるんだろうけど。

坂部：あんまり違和感とか…

原田：この漫画を読む限りにおいては、さらーっと入ってきて面白いなって思うんだけど、作者が日本人だとか、人気があったってということに対する理解っていうのは、なかなか難しいですね。

上田：たかだか5、60年でこんなに日本は断絶するんだって思いますけどね、同時に。

坂部：うん。

原田：ほんとそうですね。

上田：時間の変化の速さっていうのかね。

坂部：全然ちょっと全然違うあれなんですけれども、さっきハルピン子っていう話あったじゃないですか。満洲国成立以前だから満鉄の沿線とかそういう、時代のハルピンに入ってた時代にそこで生まれた二世とかに対するハルピン子っていうイメージがあるとする、「湾生」って基本内地の人から台湾生まれの人に対する蔑称ですよ。クレオール差別みたいなもので、内地人が植民地に渡った人たち、そこで生まれ育った人たちを差別化する用語で、日本社会も完全に序列があったりとか地域とか階層差みたいなことがすごい出る話だと思うんですけども、ハルピン子に対するそういうネガティブなイメージとかそういうのってないのかなって。

上田：どこで？日本に帰ってきた頃に対して？

坂部：どっちでもいい。当時でもいいし、本人たちの事象としては選択、選び取ってるし、そのことに誇りを持ってるといえるのはよく分かるんだけど、例えば満洲国以降に入ってきた純日本語を身につけた日本人からすると、彼らは変な日本語を喋ってるとかって言うような人とか、それよりかもっと生活に対する何か憧れとか強いのかとか、長くないからね。満洲って、だ

からちょっとわかりづらいところはあるけれども。

【引揚者】

原田：でも引揚げ者の赤塚なんかでも結構いじめられたとか、帰ってきて。

上田：：引揚げるとね。

坂部：植民地内部での階層とか序列とか地域の違いによる差別ってのは、多分絶対あったと思うんですよ。台湾なんかそれすごく明確で、沖縄人なんかは、台湾にいた時に日本人、沖縄人、台湾人みたいなランキングのされ方をされるみたいな。真っ当な日本人として受け止めてもらえないようななんかのところもあったりとか、そういう序列化ってのはあるんだろうと思うんですよ。満洲の日本人社会もそう、だからどこまでどういう形で、例えば中国人と朝鮮人が間に入ってとかっていうのはすごくある、というか、あったんだけど。

上田：あとは大連とかね。満洲国のお役人さん、満鉄職員っていうのは、ホワイトカラーとしてやっぱり一つの所に固まって住んでるし、日本語だけで過ごしてるし、社宅に住んでる人たち。桃山小学校の人達は、商売をやってる、自分たちでビジネス立ち上げて商売をやってる人たちが住んでるところにできてる小学校だから、多言語カルチャーが理解できてるけれども、ホワイトカラーではない高学歴ではないっていう限界を持ってるっていう自己認識があったように思います。当時は両者はあんまり出会わなかったかもしれないけれども、引揚げ段階で出会わなくてはいけなくて、あいつらとこいつらっていう、過去を認識したかもしれませんね。当時どこまで持ってたのかっていうのはわかんないな。ハルピン学院とかハルピン中学とか、ハルピンにおける高等教育機関のなかでお互いの派閥ってものがあったのかなかったのかっていうのを見ていけばいいのかな。ハルピン学院の中に何かありそうですね。日本から直接ハルピン学院（注：ハルピンに設立された専門学校で、後に国立大学となる。ロシア語教育拠点であった）に行く人、ハルピンからハルピン学院に行く人。

原田：周辺から行くっていう？

上田：そうそう。

上田：優秀な学生は日本の内地に進学するはずだから、ハルピン学院に行く人は二流みたいな、そういうのがあったようです。加藤登紀子のお父さんとかがハルピン学院なんだよね。建国大学（注：新京にあった満洲国の官吏養成の中心となった大学）もそうだよ。建国大学も日本の大学に行けないけど、建国大学だったら行けるよっていった建国大学に進学するっていうから。

坂部：今，書評をやるのに読んでるのが，台湾の許雪姬先生が大著出したの（注：許雪姬著『離散と回帰——「満洲国」の台湾人の記録』，羽田朝子・殷晴・杉本史子訳，東方書店，2021年），8000円くらいするような。

上田：日本語の？

坂部：日本語で，中国語より日本語が先に出たの。中国語ももうすぐでるっていうのらしくって，台湾の医者とかで，台湾で就職する時，日本人と差別されてあんまりいい目みられないので，満洲まで来ると日本人枠に割と入る，台湾人って。

原田：なるほどね。

上田：日本国籍だからね。

坂部：そう。いいってことで。学校も満洲の学校に進学したり，満洲でなんか医者が結構多かったらしいんですね。開業する人が結構いて，おまけに言葉もできたりするわけだから，かなりアドバンテージもあっただろうから。

上田：全然話飛ぶんですけど。台湾が国民政府に摂取された時に，日本語の高等教育機関に行く準備をした台湾人が損をすることになるんです。北京語喋れないから。北京語の高等教育機関ができるけれど，国民党支配下の北京語の大学に進学できなくて，大学卒業資格がないまま困ったな—ってということになるんです。うちの大学の通信教育学部がそういう台湾人いっぱい受け入れててね。台湾人校友会の層がすごく厚い。地方政治家とか，会社の社長とかが結構そこで最終学歴として日本の大学卒っていうのをとってるって言う話があって。

坂部：へー！！

上田：だから話が全然それるけれども，台湾人にとったら国民党に摂取される，北京語社会に摂取されたことによって，福建語世界の人たちは一旦キャリアが打ち切られることが起こっているんですね。だから逆に日本語でキャリア形成するつもりでずっと生きてきたのに，ここに北京語キャリアをのせなくてはいけなくなっている。ということは，逆に満洲は日本語キャリアでいけるとなるのかな。たとえば満洲で医者をやった台湾人の彼らはちゃんと北京語喋れたのかな？

坂部：なるほど。知らない，そこまで。言語的なメリットがあるって思ったのは私の感想だから，そう思っただけで，どうなんだろうな。ただまあ日本人が中国語勉強するよりかはましかも

しれないけれども。

上田：漢字は読めるよ。処方箋も書けるでしょう。でも東北訛りのやり取りは完璧にできたの
かっていったら。

坂部：確かに。

上田：閩南語の人たちとかにはつらからう。

坂部：確かに。ただまだ全部本読んでないから細かい話はちょっとわかんないけれども。

上田：許雪姫さん出したんだ。

坂部：ん。なんか20年間くらいの研究成果になると思うんですけども、日本にも京都大学にも
来てた？山室信一先生のところとか。なんか在外で一番はじめ半年ぐらい滞在してたのかな。

上田：すごいパワーのある方ですよ。

坂部：すごい力強い。私も一度くらいしかお会いしていない。

上田：うん、忙しそうにすごい勢いで研究している方ですよ。

坂部：台湾史の文脈の中で台湾から満洲に行った人たちのことを取り上げてる。だからそういう
のが可能になったのが民主化以降だろうし、台湾史って結構不遇っていうか微妙で、抗日運動史
でしかないだろうから、国民党の体制下の時は、台湾独自の歴史とかそういうのを直接見るって
いうのが出てきたのがそれ以降の議論になるみたいなので。しかも満洲に渡った台湾人ってのは
やっぱり漢奸に近いっていうか、そういう理解だったのを彼らがチャンス求めて移動した人と
して許雪姫先生は捉え直そうとしていて、たくさんヒアリングして記録にしてるんですけども。

上田：プロジェクトチーム持っていて、台湾人の日本経験のオーラルヒストリーを取ってるよう
です。あとね、上田としこに話を戻すけれど、ジェンダー研究とか、女性作家の研究、この時代
の女性作家って何者かってテーマもありますよね。その少女漫画的な女性像じゃないよね。

坂部：うん。

上田：彼女の自身の存在が、振る舞いもそうだし、

坂部：うん、

上田：一人身だし、そこの面白さというか、私が聞き取りしたハルピン引揚げ者の杉山公子さんも結局独身だったし、彼女の妹さんや弟さんも結婚されてないんだよね、なんでなんだろうなって、だからハルピンを経験してきた時に、日本のおしとやかなお家に入る女の人っていうのに馴染めない形になって帰ってくる部分があるのかなとかね、

坂部：うーん、その人は仕事は何してるの？

上田：仕事は小さい出版社の編集者みたいな仕事をしたりとか、妹さんが何してたのかは知らないんだけど、

坂部：普通の女性像には収まりきらないっていうのはあるのかもしれないですね、

上田：基本働いてる、引揚げ者って身を寄せる家にとっては厄介者なので、早く働いて家から出なければっていう負い目を背負わされている、女の引揚げ者ってどうだったんだろうね、働かなければならぬ差し迫った感じだったのかな、それこそ『紅にほふ』の竹宮恵子のおばさん達もそうなんだけれども…

坂部：竹宮恵子のお母さんのような人は専業主婦、だけど洋裁ができたのか、

上田：あんまり肩身狭そうじゃなかったかな、

坂部：でも引揚げ直後の話では、徳島の兄弟の家に行ってちょっと嫌がられたって、芸者のおばさんの息子、そこに先に帰ってきていて、その家の子どもと同じように処遇してもらってるのを（本当の母親である）おばさんは妾とかやってた人で、お金大量に持って行ってギョッとされたりとか、その家の奥さんとかには、

上田：そうだよ芸者さんやっていた人はどこかの寮母さんだったよね、

坂部：最終的にはね、養われるんじゃないかって、自分で稼がなきゃって、

上田：だから引揚げ女性って意外と仕事しなくちゃいけない立場に追い込まれる、仕事しても婚

する場合もあるけれども、結婚し損なうケースもあるのかなっていう。

坂部：引揚げてきた年齢とかにもよるのかもしれないんだけど、戦後すぐって男の数がすごい少ないですよ、戦死してるからね。私の祖父母はちょうど戦争の時、30何歳とか戦争終わった時点ぐらいで、旦那さんは戦争中に亡くなっていて、両方ともそうなんですけど、父方も母方も、おばあさんは一人生き残って子ども何人か抱えて、育ててる。その後再婚できたかっていったら全くなくて、する気もなかったのかもしれないんだけど、そういう状況の中でその世代の人達って、意外と働いてるんだよね。女の人だって働かないと生きていけないから、で、専業主婦の割合が一番多くなるのが、1975年団塊の世代が子ども持ったりとかするぐらいの世代に一番専業主婦率が高くなるっていう。戦後すぐの女性ってのは意外といっぱい働いている。

上田：なるほど、うち農家なんで分からない、そこが。

坂部：第1次産業とかの人はみんな働くのが当たり前だもんね。

上田：そうそう。

坂部：その職業が現金につながったのかっていうのは別かもしれないんだけど。

上田：第1次産業はずっと働く場が見つかるんだけど、この都市民って農村から出ていたわけではないので、帰ってきて身を寄せる農村がなかったりする。それで、都市に帰ってくる形にした場合、身寄りがなければ働くしかないっていうスタートをするようなこともあるのかなっていう。

坂部：旦那がいて仕事を持てれば、高度経済成長期に繋がるまでの時期まで耐えられればそこから先は、男が一人扶持で家族全員のものを稼げるっていう体制になってくので、それでいいだろうけど、支え手がいなくなった家庭っていうのはそれなりにあると思うので、そういう人たちは何らかの仕事は見つけざるを得なかったのかもしれない。

原田：そうですね。将来の夢がサラリーマンのお嫁さんになっていくのは、70年代ぐらいじゃないかな。

坂部：だから団塊の世代って戦後すぐで一番民主的な世代っていわれたのに、女性像、女性の生き方のイメージとしては、家庭に入っていく割合が一番高い。

原田：高いでしょ。団塊の世代の民主主義ってほんと考えた方がいいよ。

坂部：いやだからまあ、それが本当か嘘かは知らないけれども、そうやって言われてたのに普通にイメージされるのとちょっと逆行する。昔の女の人は結構働いてるし、みんな、そのトレンドが反転していく、働いてた女性がどんどん家庭に入る割合が高くなっていくけど、それでも全部がもちろん家庭に入るわけじゃないからって、もちろん働き続ける人はいるけれども、それが反転してまた働き続ける女性が増えていくっていうのが、その転換点、一番最高に専業主婦になる割合が高かったのは1975年っていうことなので。ただ、そのあと専業主婦率が落ちていくのも日本はすごいゆっくりだったから。

原田：そうですね。

上田：戦前に専業主婦ってそんなにいないもんね。

坂部：そう。サラリーマンの妻じゃないですか、専業主婦って。

上田：そうそう。

坂部：そういうお勤めの人ってそんなにたくさんいない。

上田・原田：いない、いない。

上田：それこそうちの祖母は女学校出た後、古美術商のところで女中奉公してる時に結婚相手決まったから帰って来いって行って、引きずり返されて農家の嫁になってしまった、つまらない、みたいなこと言ってました。これが彼女のライフヒストリー。

坂部：うちの祖母のライフヒストリーは、女学校行って、女学校卒業と同時に結婚して、それこそサラリーマンの妻なんです。三菱の人の奥さんになって、それで戦争中に旦那が亡くなって、エンジニアだったのか戦争には行ってないんだけど、死んで、それで、そこから急に働かなくてはいけなくなって、名古屋で寮母さんとしてずっと働いてた。

上田：だから働いてるんだよね、戦前はね。学校出てすぐ働くようになるから。そうか専業主婦が当たり前だった社会って結構短時間しかなかったんだ。

坂部：ずーっとあるようなイメージとか、なんか女性の伝統的なイメージとかあるんだけど

も、それは非常に新しい作られたものであるっていう。良妻賢母思想がすごい近代化的な、女子教育の中で作られてきたっていうのが、近頃よく言われる話ですね。

上田：いやだから『フィチンさん』のなかの女学校像の中で、労働するべきだってフィチンさんが労働キャンペーンはるし、フィチンさん、最後のところで許嫁って言われて、そんなの古いわよって言っちゃうあたり…、その主張自体がこれは当時のトレンドだったのか、上田としこの個性だったのかっていう。いったらなんだけど、この女学校は良妻賢母教育してる女学校ではないし、元々中国人の学校だから、日本的な良妻賢母教育をしなくてはいけないわけではないけれども、お嬢様教育はしてる。そうじゃないっていう、働く女子教育、労働は美しいみたいな、うだ、労働は美しいを語ってるよね、あの女学校のなかでフィチンさん。

坂部：フィチンさんはね、でも周りのお金持ちのご令嬢はそんなこと一みみたいな対応じゃない？

上田：いやでもシスターとかは働くことはいいことだみたいな感じで支援はするんだけど、あそこも実は50年代の時代性がほんのり入ってる。

坂部：日本社会がうつされてるっていう感じじゃないかな。どっちかって言うと。

上田：そうそう。

原田：その通りだよ。だから、受け入れられたところもありますね。それに、『フィチンさん』の最後で、やっぱり玉の輿に乗らなかったという受け入れられたのかな。いきなりお嫁さんになるんじゃないで、当然そうなるだろうっていう話の流れですもんね。中国の何て言うんでしたっけ、ちっちゃい時からの許嫁じゃなくて……。

上田：あ！童養媳！童養媳ね、リアルに。ご主人様の思惑として、子どもにはこれぐらいしっかりした年上の女の子をお守りに付けとかんといかんよねって言うところからスタートして、どう見たって嫁にするつもりらしいよっていう所々に伏線にあるから、童養媳だよ、これ。

坂部：たしかに。

上田：不幸じゃない童養媳だよ。

坂部：まあそうだね。

上田：童養媳って通説としてはかわいそうで，とっても悲惨な話で。

坂部：ほんとに。金で買い取られて，殴られたりなんかしながら，労働させられて，あげくの果てに，家の子どもを産めみたいな。

原田：半奴隷みたいなものですよ。

上田：そうなんですよ。

原田：まあそれでもこんな条件のいいものでも断ってしまうという，伏線としてはあるわけだから。

上田：というか，童養媳の文化を知らない人はどう思ったんだろう。読んでた人のなかに童養媳を知ってる人がどれくらいいるのかしらって思いましたけど。

原田：中国にいったら結構よく聞く話ですよ。

上田：あーそうかあ。

坂部：でもそういうイメージで読んでなかったから。

上田：いや私も二回目に読んだときに，やっとこれ，童養媳だって最後のオチのところで気がつきました。子守りさせながら，嫁として育てる気満々の掌櫃とか見ると，これは童養媳だと。

原田：いや，そうなんだよね。でもそれは多分，どこまで日本人がわかったのか，わからなかったのか。でも結構わかったんじゃないですか，この童養媳の話は。

上田：いや，知ってる人は分かったかもしれない。行ってる人は分かったかもしれない。中国経験があるとか，中国文化に造詣があれば分かっただろうとは思うけど。

原田：もちろん，上田としこの性格がかなり反映されたと思いますけど。ちょっと気の強そうな感じ。中国ではこういう女性が多くなったのかなって思いますけど。

上田：どう思う？

原田：上海ではこういう強い女性が多いんですけど。

上田：上海は女の人こわいと言われますね。

原田：そうそう。強いから。

上田：自分でやれることは自分でやる。それからお節介やきなところもある。

坂部：まあ、どうか。婚姻法みたいなものつくって、それこそ童養媳文化みたいなのをどんどん崩していくわけじゃないですか。戦後の中国は。だから、婚姻法もつくったからといって、みんながそのまま重視するわけでないから、それを守らせる運動みたいなのをずっと何年間かやるんですよね。共産党の集団化やなんかの政策とタイアップしながら、浸透させていくなかで、家父長の権限があんまり強いと、それは国家にとって得策ではないので、そういうのとぶつかる部分の家父長権は弾圧されるんですよ。じゃあ、家の中で完全に男女平等かっていうと、そこまで介入する気はないので国は、国の政策に、違わない程度に丸めたらそれ以上はやらないみたいなことだったっていう話をジェンダーとかの研究でみますけどね。

上田：まあ、その方が男も女も適度に働かなくてはいけないから、生産効率いい。

坂部：で、全員労働力化したいっていうのが前提としてあるっていうのかもしれない。

上田：だから共産党的、中国にはあう女性像ではありますよね。階級は最下層からスタートですからね。門番の娘っていう。階級的にはとっても紅くて優秀なところからスタートする。そうか、それで坊っちゃんなんかのお嫁さんになりません、っていうあたり、中華人民共和國的にもすごくいいよね。

坂部：だからそういう共産党系の思想がどこまで本人が意識したり、イメージして書いてるのかわからないけれども割とそれにあってるよね。

上田：『フィチンさん』の設定としては、門番の娘は確かにそこはある。よみがあるのかもしれないっていう気がするね。門番は日本人にはリアルじゃないのではと思った。

坂部：なんか組合運動やってなかったっけ？『フィチン再見！』のなかで。

上田：あーあったあった。

原田：満鉄のなかでね。

坂部：そういうのに対するある種の。

原田：やっぱりそういうのと，中国共産党を意識したというよりか，それもあったのかもしれないけれども，日本の労働組合もかなり意識してたというか，当時のね，そういうところもあるのかなって思いますね。

上田：階級闘争側だったんですね。

原田：そうです。『ファイチン再見！』のなかでは，上田としこはリーダー的な存在でしたね。ところで，長らく話してきましたが，ここまで話しが広がるとは思いませんでした。『ファイチンさん』が出版された当時の世相というか，時代の雰囲気というか，さまざまなものがみえてくる感じがします。それをすべて語り切ることはできませんが，個人的には面白い視点というか，さらに突っ込んでみたくなる話しがてんこ盛りでした。とくに近年の反中感情の高まりの中で，実は漫画が意図したかどうかは別として，それを助長した可能性について調べたくなりました。ただ，紙幅の関係上，そろそろ終わりにしなければなりません。最後に，みなさん，感想というか，強調しておきたい点がありましたら，一言お願いします。

上田：こうして，他の方と話題を共有すると，一人で読んでいるよりもいろんなことに気が付きますね。今回は貴重な機会をいただき，ありがとうございました。次は『ファイチンさん』の連載時の読者世代の方にお話してみたいですね。戦後間もないころの中国観ってどんなのか，そのあたりから知れたらいいなと思います。そのまえにアニメの鑑賞会もしましょう。

坂部：『ファイチンさん』の舞台になった時代のハルピン，上田としこがいたころのハルピンは一世紀とはいえないまでも90年くらい前の時代。それを上田としこが，日本で漫画に表現したのが60年くらい前ですね。齋藤先生と，上田さんとわたしは，今から20年くらい前，1990年代末から2000年代最初くらいに，その中国東北で過ごしたんですね。今日は，そうした中国東北の時間を共有する方と，また中国をフィールドとされる方々と一緒に，この作品を振り返ることができて，とても考えさせられました。たとえば歌謡曲や流行歌というのも，ある時代にある形式が発展して広まるという形があり，東アジアのなかでの影響関係もあると思うのですが，日本の漫画というのも，その展開は時代限定的なものがあって，50年までにはなかった表現が今はあるとかするでしょうし，その漫画の発展史や展開のなかで，中国や満洲の経験がどのように位置づけられるのか，もっといろいろ考えてみたいと思いました。ありがとうございました。

齋藤：『フィチンさん』からこんなに話が弾むとは予想していませんでした。とても楽しかったです。同時代史を感じることができました。たしかに満洲を生きた人がいたことや、そこをフィールドに研究をしてきた人がいることを。

いろいろな研究課題も見えてきたように感じました。満洲での経験が、日本と中国の双方の人々にとってどのような意味を持ったかは、今日でも色あせない研究課題だと思います。また、中国でどのような研究が進んでいるのかも興味がわきました。

私がハルピンにいた1990年代後半は、市立図書館とかにも満鉄関係の史料や満洲国に関わる史料が未整理でありました。今は、どう史料が保存されているのか、公開されているのか気になるところです。まだまだ地域には史料が眠っているのではないのでしょうか。ハルピンは大都市です。郊外の街にも何か残っているかもしれません。現地調査を先生方としたいくなりました。今回の企画を、何らかの形で発展できればなあと。

原田：本日はありがとうございました。

注

- 1 近畿大学文学部教授
- 2 名古屋大学大学院人文学研究科准教授
- 3 日本福祉大学教育・心理学部准教授
- 4 日本福祉大学経済学部教授